

宗教文化教育の教材としての映画

井上順孝

はじめに

半世紀以上前の古いものなら1950年代に制作された『十戒』、21世紀にはいつてからのものなら『パッション』や『マリア』といった、いわゆる宗教映画と呼ばれるものは数多くある。こうした宗教映画のカテゴリーに含まれるものの他にも、宗教的テーマが重要な意味をもっている映画は数多くある。ドキュメンタリー映画、シリアスなストーリーの映画だけでなく、コメディ映画、恋愛映画、アクション映画などとされているものの中にも、宗教的テーマが深く織り込まれているものを容易にリストアップできる。映画が人々の日常世界を描こうとするなら、イスラーム圏は言うまでもなく、キリスト教文化圏の国々でも、宗教に関わるもろもろの事柄が必然的にはいりこんでくるからである。日本では比較的そうした映画は少ないとも言えるが、日本人からすると宗教あるいは宗教文化のテーマとは関係ないように思えても、外国人からは宗教的要素がふんだんにあるように見える場合もある。

比較的知られた例を挙げると、『平成狸合戦ぽんぽこ』（高畑勲監督）という映画を日本宗教の理解のために用いているフランスの研究者がいる¹。また宮崎駿監督のアニメ映画『風の谷のナウシカ』、『もののけ姫』、『千と千尋の神隠し』などは、日本人のアニミズム信仰、靈魂観、神観念などを論じる際に用いられている²。

このことを考慮すると、映画は宗教文化教育の教材として、欠かすことができないものの一つである。宗教文化教育の教材の大半を占めるのは現段階では文字媒体のものであるが、これに比べると映画を教材とすることには当然利点もあれば弱点もある。情報媒体へのアクセスがやや面倒であるというのが弱点の一つである。しかし映画はかつてのように映画館で上映されたり、テレビで放映されるだけではなくなくなった。AV機器の技術が発達し、ビデオテープ、DVDなどとして、個人が観たいものを選んで随時観れるようになった。さらに一部ではあるがウェブ上でもアクセスできる映画がある。こうした現在の状況は、教える側にとっても、また学ぶ側にとっても、映画の利用を格段に簡便なものにしてきている。映画を宗教文化教育の教材として用いる上で、願ってもない状況となってきたのである。

宗教映画であれば、宗教系の中学校、高校において、宗教という科目の他、歴史、地理、倫理といった分野に関わる科目で、実際にビデオやDVDになった映画を教材として利用している例が数多く見られる。とりわけキリスト教系の学校では利用が盛んであるが、それは素材の豊富さも関わっている³。それぞれの宗教の創始者についての物語、歴史的展開、重要な出来事、そうしたものを具体的にイメージさせようとしたとき、宗教映画は非常なインパクトをもつ教材となりうる。

だが、宗教文化教育は特定の宗教の立場から宗教的教化を目指すものではない。むしろ自分が属していない宗教文化、あるいは自分が信じていない宗教文化についての理解が重要な課題となる。そうした立場からすると、宗教映画と呼ばれるものだけでなく、さまざまな視

点から宗教的テーマに迫った映画や、場合によってはさほど意図せず宗教的テーマを扱ってしまったような映画を広く視野に入れることが重要になってくる。映画は基本的に娯楽的要素が強いということがあり、また必ずしも事実を明らかにしようとしたり、史実に忠実であろうとするものではない。そのことが結果的に宗教文化教育にとってもさまざまなバイアスをもたらす可能性がある。ここに映画を宗教文化教育に採り入れるときの大きな難題が生じる。

以下では、まず宗教的なテーマを含む映画を具体的にいくつか取り上げるが、その映画によって広がりうる視点と、生じうるバイアスというものに注意を払う。これらの映画から拾い上げられる宗教文化に関わるテーマはきわめて多様であるけれども、紙数の関係もあり、本稿では大きく次の4つの視点に絞って、具体的な映画の事例とそこに浮上するテーマについて言及する。その上で、宗教文化教育が映画を題材としたときに直面せざるを得ない根本的な問題についても考察する。

- ①習俗や社会的慣習と宗教文化
- ②宗教史と宗教文化
- ③グローバル化と宗教文化
- ④宗教対立と宗教紛争

I. 習俗や社会的慣習と宗教文化

日本の年中行事（初詣、節分、桃の節句、七夕、菊の節句など）や人生儀礼（初宮、七五三、成人式、結婚式、葬式など）の大半は、神社や寺院とゆるやかに関わりをもちながら、人々の意識としては社会的な慣習として実践されている。しかし習俗化した慣習にも、その底に潜む宗教的観念や理念というものへの関心が色濃く見いだされるものもあり、それを描き出す映画がある。宗教文化教育の教材になりうるものは数多い。さらに昨今は日本でもハロウィーンが短期間に年中行事化したように、グローバル化が進む現代世界では一つの宗教文化圏で担われてきた宗教習俗が、見る間に世界的に広がるという現象もみられる。このことは宗教的習俗を扱った映画が一つの社会や文化の問題にとどまらない視点を提供する場合が多くなることを意味する。

(1) クリスマス

習俗化した宗教文化として代表的なものの一つはクリスマスである。クリスマスが年中行事的な祝祭になっているのはキリスト教文化圏に限らないが、この行事が現在でも宗教文化と深く絡み合う局面を描いた映画は、欧米、ことに米国で制作されたものに多く見出される。教会でのミサに加え、クリスマスが今日のような家族の団欒の大切さを感じる行事になる上で、チャールズ・ディケンズの小説『クリスマス・キャロル』が与えた影響は大きいとされる。19世紀半ばのこのイギリスの小説は、いくどか映画化された。育った境遇もあって、まるで守銭奴のように生きているスクルージが、クリスマスイブに過去、現在、未来の精霊にいざなわれて自分の姿を見て改心していくというストーリーである。

1970年に公開された『クリスマスキャロル』⁴はロンドンの下町を舞台として、スクルージの改心の過程を分かりやすく描く。また2004年には『A CHRISTMAS CAROL』⁵というミュージカル映画ができた。ここでは3人の精霊のうちの2人が女性であるのが注目され

る。2009年の『クリスマス・キャロル』⁶はディズニーのアニメ映画である。

同じ小説が下地であるので、筋書はどれも大きくは変わらないが、キリスト教で好ましいとされている価値観の一部、すなわち家族を大切にすること、貧しい人に施しをすることが、背景に据えられている。世俗的財への飽くなき欲望と、愛や慈しみに満ちた心とが、あまりにも単純に対比されていると思えなくもないが、映画が発するメッセージという観点からは、分かりやすい構図である。きわめて世俗的なイベントと化した日本のクリスマスとは少し異なる意義を考えていくときに参考にできる。

『フォー・クリスマス』⁷はどたばた喜劇の部類に属するが、現代アメリカ人のごくありふれたクリスマスへの感覚が垣間見える。家族とのクリスマスを嫌がって、恋人同士でフィジー行きの予約をしたブラッドとケイトだが、サンフランシスコ空港で濃霧ですべての飛行機が飛び立てないという事態に遭遇する。さらにハプニングがあり、ふたりはそれぞれの両親の家に行く羽目になる。ともに両親が離婚していたため、都合四つの家のクリスマス(フォー・クリスマス)に付き合うことになる。四つの家で思わぬ出来事が続くが、やがて子どもなど欲しくないと思っていたふたりに変化が訪れる。ハッピーエンドのコメディなのだが、どこか古き良きアメリカへの懐古調が見え隠れする。こうした形で伝統的なアメリカの価値観が滲出してきているという解釈も可能である。

ヨーロッパ大陸の映画には、「明るくない」クリスマスを描くものもある。『クリスマスのその夜に』⁸には、クリスマスの夜にノルウェーの町で起こったさまざまな出来事を重ね合わせている群像劇である。冒頭でクリスマスに飾る樅の木を探す男の子を狙う銃口が映し出される。それが誰であるか、なぜなのか、それは映画の最後の方で明かされる。

多様な人物が登場する。クリスマスイブなのに診察に出かけなければならない医師。物乞いをするも足を止める人もなく、みじめに故郷へ帰るための金を手に入れようとする路上生活者。離婚したが子どもに会いたくてたまらず、無茶苦茶な手段を使う男。妻子のある恋人の態度に業を煮やす女性。クリスマスを祝わないイスラームの女の子の家に行き、望遠鏡で空を眺める少年など。

夜勤の救急を担当していた医師が、呼び出された場所に行くと男にナイフをつきつけられ、ある所に行くように命じられる。その男の妻が出産に苦しんでいたのである。男は実はセルビア人で、妻はアルバニア人。コソボに帰れば家族に殺されるという運命にあった。ここで冒頭の銃口との関係が示される。ラストには無事子どもが生まれたふたりが美しいオーロラを見るシーンがある。エンディングの曲は「クリスマスのその夜に」である。神を信じれば幸せだと言おうとするのでもなく、神はいないと絶望を描くのでもない。神の働きが有るような無いような、微妙な情景がつけられる。ここでは習俗化した宗教的年中行事を描くことが主眼ではなさそうだ。クリスマスを軸にしながらも、現代社会のここそこに潜む社会問題に焦点を当てている。考えさせるための教材となろう。

現代のクリスマスにはサンタクロースが欠かせない。サンタクロースが信仰をともなっていた時代を描くのは『三十四丁目の奇跡』⁹という、第二次大戦直後の1947年に制作された映画である。ニューヨークのマンハッタン34丁目が舞台で、アメリカ人の当時のサンタ信仰をある程度推測できる。しかし、サンタクロース伝説は現代ではさまざまに展開し、北欧が舞台になってきている。フィンランドにはサンタクロース村があり、サンタ宛ての手紙を受け取ってくれる。サンタクロース村はラップランドのフィンランド部分にある。北緯

66.3度の北極線上のあたりで冬は極寒の地となる。このあたりを舞台にした映画が『サンタクロースになった少年』¹⁰である。サンタクロースの話は、聖ニコラス伝説がもとであるというのが定説になっているが、この映画はいわば「フィンランド版サンタクロース」が誕生する話である。サンタクロースの少年時代を描くという設定だからである。

冬の夜、幼いニコラスの両親と妹が、湖に落ちて命を失い、一人残されたニコラスは、村人たちによって1年交代で育ててもらふ。どの家族も貧しかったので、村人たちがとった苦肉の策であった。養ってもらふ家を変えるのが、クリスマスの日であった。ニコラスは器用さを活かして、家を去るにあたり世話になった家の子供たちに、木で作ったおもちゃをそっと置いていくようになる。しかし村が極度の不漁で厳しい状況に陥り、ニコラスはイサッキという物売りに引き取られる。偏屈なイサッキであったが、やがて村の子どもたちへのクリスマスのプレゼントを作り続けるニコラスに心を開いていく。聖ニコラスについての従来の伝承を知らない、サンタクロース村の歴史的由来を語っているのかと勘違いする人もいそうな内容である。

このように娯楽映画に見えるものであっても、クリスマス、サンタクロースが、欧米においてはどのような宗教的観念に関連づけられているかを考える参考になる。クリスマスが商業化しているのは、どの国でも同じであるが、信仰に通じる回路がストーリーのあちこちに読み取れる映画がある。その読み取りにはキリスト教の変遷についての基本的な知識が要求されることになる。

(2) 葬儀

日本の年中行事、人生儀礼の中では葬儀がもっとも宗教的観念を刺激するものであろう。『お葬式』¹¹は、葬式という誰もがいくどとなく経験するような出来事を、制作当時としては非常に斬新な視点から描いている。冠婚葬祭という、それまでの日本社会では世代から世代へ決まり事のように伝えられてきた儀礼の場が、1980年代には急速に継承がおぼつかなくなってきた光景を、ユーモアを交えて描いている。

俳優の井上侗助は妻で女優でもある雨宮千鶴子に頼まれて、急死した千鶴子の父の葬儀を仕切ることになる。しかし、葬儀のやり方に疎い侗助は、マネージャーである里見の助けを借りて乗り切ることになる。通夜から葬儀までの儀礼をどうするかを、葬儀屋のアドバイスを受けながら決められていくことになる。故人の兄で千鶴子の伯父である雨宮正吉が、故郷での昔ながらのやり方についていろいろ口出しするが採用されない。侗助夫妻は、葬儀の直前に葬儀のやり方を解説したビデオを見て、作法を急遽学ぼうとする。葬儀のマニュアル化が進行している時代をさりげなく描いている。

真言宗の檀家であったが、近くに真言宗の寺がないということで、里見は浄土真宗の僧侶を頼むが、これは葬儀の際に呼ぶ僧侶については、宗派にこだわらなくなっていた状況を踏まえている。大変な「善知識」であるというふれこみの僧侶は、高級車のロールスロイスに乗ってやってくるが、ここにいわゆる「葬式仏教」への批判的なまなざしがあると見て取れる。

日本では大半が葬儀は仏式で行われる。したがって葬儀は読経を始め僧侶が主導するイメージがある。『お葬式』ではそれが葬儀屋に主導権が移っていることを暗示していたが、さらに葬儀の準備をする納棺師に焦点を当てたのが、『おくりびと』¹²である。2009年にア

カデミー賞外国語映画賞を受賞している。納棺師が主人公であるから、当然死体に向かいあう場面が何度も出てくる。自殺者、孤独死した老人、子ども、交通事故死した若い女性等々。この映画が話題になったのは、死体と正面から向かいあう納棺師の姿にあったと考えられる。遺体への死に化粧、最後の心をこめた扱いはかつては親族が行ったことである。しかし、現代はそうしたことさえ、葬儀産業にゆだねざるを得ない。であればこそ、その罪悪感をいくばくか軽くしてくれるのが、映画に登場したような納棺師の心のこもった振る舞いと考えられる。

しかし、人生儀礼の一つとみなすにはあまりに過酷な現実もある。2011年3月11日の東日本大震災では1万5千人を超える死者が出た。ほどなく深刻な問題が起こる。被災地の各地で突然の多数の遺体をどうしたらいいかである。この事態を、岩手県釜石市の遺体安置所での実際の取材をもとに映画化したのが『遺体～明日への十日間』¹³である。最初から最後まで辛い場面が続く映画である。並べられた泥まみれの遺体。遺体の確認のために一人ひとりの口をこじあけ、歯を調べていく歯科医と助手の若い女性。連日遺体と向かいあい、心のバランスを崩す市の職員。読経に来たものの、読経の声を詰まらせる僧侶。

次々に運ばれてくる遺体の一つひとつに丁寧に対応するのは、かつて葬儀関係の仕事をしてきた経験があり、ボランティアを申し出た民生委員の相葉である。「死体ではない、遺体だ」と相葉は職員らに注意の言葉をかける。遺族にとっては遺体というより、「死んだとは思えない人」が目の前にいるに違いない。通常の葬儀ならきつとなされるであろう、きれいな死に化粧と枕元への花の飾りが無いことに、悔しさや申し訳なさがこみあげるのは自然の理である。そうした悲痛な思いをさまざまに描いていく。宗教家の役割の変化を考えさせる映画でもある。

年中行事や人生儀礼が宗教的要素をもつことは、具体的な場面を提示することで了解しやすくなる。こうした映画はその可能性をもつが、むろんそれを活かす上では、民俗信仰についての素養が教える側に必要になる。

II. 宗教史と宗教文化

宗教文化教育にとって、個々の宗教史を理解するための映画はもっとも貴重な素材と言える。宗教史、さらに現代宗教に関係するテーマを扱った映画はことにヨーロッパに多いが、それを個人で網羅するのはきわめて困難である。ここでは人気を呼んだ映画や高い評価を得た映画を中心に、宗教文化圏ごとにいくつか取り上げて、そこで読み取っていけそうなことを述べる。当然ながら、一つの映画でも宗教のどのような側面に関わっているかの解釈は多様になる。それゆえ、ここで述べる個々の映画への着眼点はあくまで例示的なものにとどまる。

(1) 東アジアの宗教文化への理解

①中国の宗教文化

中国や韓国は大乘仏教、儒教、道教については、その影響の多寡はあるにしても、共通に影響を受けた宗教文化である。しかし、近代以後の社会変化はかなりの違いをもたらしている。こうしたことも映画を通して感じることができる。

中国の現代宗教や宗教文化への位置づけを知る一つのルートは香港映画である。娯楽性の

強い映画がほとんどであるが、そこからも現在の中国における伝統仏教の評価のようなものが見えてくる。『少林寺三十六房』¹⁴は17世紀の清の時代の伝説的な拳法の達人劉裕徳（リユー・ユテ）を主人公とする。劉が嵩山少林寺において課せられた修行の様子がかなり具体的に描かれて興味深い。嵩山少林寺は中国河南省にある名刹である。少林寺には禅宗において「西天第二八祖、東天第一祖」とされる達磨太子が訪れたとされる。「西天第二八祖、東天第一祖」とは、インドで28代目の祖師、中国で初代の祖師という意味である。同寺の壁には拳法の訓練に励むインド僧らの様子を描いた図がある¹⁵。また7世紀にインドに渡り、多くの経典を持ち帰った玄奘も、晩年は嵩山に行くことを望んだが、皇帝がそれを許さなかったと伝えられている。

天達（ティエン）将軍に父や仲間を殺された劉は武道を極めようと、嵩山少林寺の戒律院で修行に励み、僧名を三徳とする。35の修行房での厳しい修行が始まるが、最初いきなり頂房（最後の房）から修行を始めようとして、気合のみで倒され叩き出される。そして基礎訓練から始めさせられる。当初は手を抜こうとするが、すべて見破られ、しだいに真剣な修行態度へと変わっていく。7年の歳月を経て、すべての房を極め、どの房を選ぶかを決める段になり、新たに房をもうけると決意し、下山するのである。故郷は依然として天達将軍に苦しめられていた。三徳は同志を募り、将軍への闘いを挑む。将軍への闘いには少林寺の師も味方する。そして、ついに目的を達し、新たに街中に少林寺の塾を開設した。これが少林寺三十六房と呼ばれることとなった。

主人公の劉裕徳は、17世紀に実在した僧である三徳和尚がモデルになっている。三徳は、広東省の出身で、武術にすぐれていたようだ。のち「反清復明」、すなわち清を倒して明を再興するという目的をもって広州に西禅寺という寺を建立した。しかし、実際は最後には清兵に攻撃され戦死している。

香川県の多度津には戦後宗道臣により日本少林寺拳法が創設された¹⁶。しかし、これは嵩山少林寺とは別の組織である。特務機関の一員として中国に渡った宗道臣は、戦時中、中国各地で複数の師から拳法を学んだ。戦後日本に帰ってから、その精神的退廃を憂え、自分なりに集大成し、少林寺拳法と称したのである。しかし、両者は交流を重ねている。

少林寺をテーマにした映画はその後も作られ、1982年には『少林寺』¹⁷、また2011年には『新少林寺』¹⁸が制作された。『新少林寺』の冒頭では、死者への供養に「南無阿弥陀仏」という言葉が唱えられる。少林寺は禅宗であるが、中国では日本と違って、禅宗と浄土教とは融合した。宋の時代には禅宗が栄えたが、明末には禅は念仏と密教的要素を取り込み、以後の中国仏教のあり方に影響を与えた。この映画でも禅宗である少林寺の本堂に、大きな阿弥陀仏が置かれている。日本の禅宗なら、本尊は釈迦仏である。現代中国に伝えられている仏教儀礼の一端を垣間見れるものの、映画自体はあくまでアクション映画である。

なお、ここでは触れないが、香港で制作されたいわゆる「キョンシー映画」（1979年の『霊幻少林拳』、1985年の『霊幻道士』など）は道教における他界観も反映しており¹⁹、現代中国でそれが一般にどのように受け止められているかを考えるときに参考になるものである。

②韓国の宗教文化

韓国は伝統的に大乘仏教と儒教の影響が大きく、さらに道教的観念は日本より深く影響し

ている。しかし第二次大戦後キリスト教の影響が急速に高まり、今では人口の3割近くに達する。それゆえ現在の韓国の宗教文化について論じる場合には、キリスト教の広範な影響を考慮しなくてはならない。映画作品にもキリスト教的なテーマを扱った映画を見いだせる。

『私たちのしあわせな時間』²⁰は死刑囚のチョン・ユンスと元歌手のユジョンが中心的人物である。だが現在の韓国の宗教文化を考える上では、カトリックの修道女であるユジョンの伯母の描き方が見逃せない。伯母はユンスの心の立ち直りを願いユンスの苦しみに向かいあう。ユンスは強引に誘われた企みのおり、ある娘を殺してしまう羽目になるのであるが、その娘の母親がユジョンの伯母に連れられて面会に来る。ユジョンもその場にいる。母親の激しい罵りの言葉にユンスはうずくまり謝罪する。しかし、気を取り直した母親は、赦しきれないが赦したいという自分の気持ちをユンスに伝える。これがユンスを改心へと導く。

ユジョンとユンスが刑務所の面会室で向かいあうシーンが幾度かある。その部屋には小さな十字架とキリスト像がある。実際このような面会室が韓国の刑務所にあるのかどうか分からないが、宗教の雰囲気背後に小さく添えられている。また刑務所の中で、神父がユンスの足を洗い、語りかけるシーンも韓国におけるカトリックの社会的機能を伝えているようである。

『訪問者』²¹には、主人公として対照的な2人が登場する。職がなく離婚状態のホジュンは、ワンルームでかなりすさんだ生活を送っている。ある日浴室のノブが壊れ、中に閉じ込められてしまった。長時間裸のまま出ることができず、気を失いかける。そのとき、何日前にホジュンの家に宗教の勧誘に来たイ・ケサンがやってくる。ケサンはかすかな「助けて」という声に気付いて部屋にはいり、ノブを壊してホジュンを救い出す。

これをきっかけに2人は少しずつ親しくなる。最初ホジュンはケサンが宗教へ誘うのが目的だろうと警戒していたが、しだいに打ち解けるのである。ケサンが自分の宗教のことを黙っていたことを理由に家庭教師を断られたのを知って、ホジュンは同情する。しかし、すさんだような毎日からなかなか抜け出せない。

韓国では徴兵制度がある。ケサンは信仰に基づき兵役を拒否する。判決の前に自分の信仰に基づく信条を毅然と述べる。ケサンは懲役1年6ヶ月の刑を言いわたされる。ホジュンは傍聴席でケサンの信仰の吐露と判決とをじっと聴いている。ホジュンの生活が変わるのは、この出来事のあとである。信仰を持つ者と持たざる者とのねじれ関係と交流とが、淡々と描かれている。ケサンの属する教団のモデルは、おそらくエホバの証人である。二人連れで各家庭を訪問する。布教用のパンフレットが用意されている。映画を観たがらない。信仰に基づき兵役を拒否する。このように描かれているからである。映画のストーリーから、韓国でエホバの証人にどういう位置づけが与えられているかを考える参考にできる。

(2) インドの宗教文化

『リトル・ブッダ』²²は、若きキアヌ・リーブスがブッダ役の映画である。ニューエイジ的な関心が見て取れるが、欧米からのインド仏教観の一つという意味でみると興味深い。米国シアトルに住む9歳の少年ジェシー・コンラッドの両親のもとに、ある日、2人のチベット僧が訪れる。ジェシーは、9年前に他界した高僧ラマ・ドルジェの生まれ変わりの可能性があるというのである。ドルジェの他界した1年後に生まれていた。生まれ変わりかどうか確かめるために、ジェシーはチベット僧とともにブータンに行くことになる。父親も同伴す

る。そこで他の2人の生まれ変わりの候補者の少年、ラジュとギターとともに、ブッダの生涯について話を聞かされることになる。

誕生してすぐ立って歩いたという奇跡的なできごとなど、ストーリーの要所要所で、神話化されたブッダの生涯を描く場面が挿入されている。王子として何不自由ない生活を送っていたシッダールタがあるとき解脱について考えるようになり城を出る。有名な「四門出遊」の話に基づく場面である。苦行の様子や奇跡譚も挿入される。老楽士が弟子に「弦は強く張りすぎれば切れる。緩めすぎても弾けなくなる」に語るのを耳にして、中道の正しさを悟る。魔王との闘いも描写される。そして最後は自分の心の克服というもっとも重要なプロセスがくる。こうした場面だけを拾っていくと、いわば神話化されたブッダの悟りへの道のハイライトシーンになる。学問的な議論にははいりこまないで、伝説化された話の再構成に徹しているから、それはそれで意味をもつ内容である。

インドの人口の約8割はヒンドゥー教徒だが、10数%のムスリムもいる。両者の対立は第二次世界大戦後、インドがイギリスから独立してからもずっと続いている。宗教分布が配慮されてヒンドゥー教徒が多いインドとムスリムが多い東パキスタン（現在のバングラデシュ）及び西パキスタン（現在のパキスタン）という具合に別々の国としてイギリスから独立したわけだが、宗教問題は解決とはほど遠い。

『ボンベイ』²³はこうした背景を理解した上で見るべき映画である。ジャーナリスト志望の青年セーカルとムスリムのシャイラー・バーヌとの恋愛を中心に、ヒンドゥー教徒とムスリムの間の摩擦を扱う。家族の反対を押し切りふたりは結婚する。双子の男の子が生まれ、幸せな生活を送っていたが、1992年の「アヨーディヤー事件」²⁴をきっかけに、ボンベイでも激しい宗教暴動が起きる。ふたりとその息子たちも暴動に巻き込まれていく。インドにおける宗教紛争にも関係する映画である。

インド宗教の基本的観念として、輪廻と解脱はもっとも重要なものである。輪廻転生は今でもごく普通に信じられている観念である。ハリウッド映画の『恋する輪廻～オーム・シャンティ・オーム』²⁵でも輪廻の観念はストーリーの中で重要な役割を果たしている。ハリウッドというのは、ムンバイの旧称であるボンベイの頭文字「ボ」と、「ハリウッド」を合成した語である。ムンバイを中心に大量に作られている。ハリウッド映画には歌と踊り、そして恋が付きものだが、むろんこの映画も例外ではない。映画制作の話が劇中劇としてストーリーに組みこまれていて、それが最後のどんでん返しにつながっている。

オーム・プラカージュは脇役専門の俳優であったが、いつか主演にと夢を見ている。そして美貌の人気女優シャンティにあこがれている。ある日オームはシャンティが出演する映画の撮影現場で、撮影中の事故で炎に取り囲まれてしまったシャンティを助けたのだが、これをきっかけにふたりは仲良くなる。すっかり有頂天になるオームだが、シャンティはすでにプロデューサーのムケーシュと事実上結婚していた。ところが、彼女が妊娠していることを知ったムケーシュは、あろうことかシャンティ殺害を図る。オームは殺されそうになったシャンティを助けようとして大やけどを負い、さらに車に轢かれて死ぬ。その車を運転していたカプール夫妻の間には、その日に男の子が生まれ、オーム・カプールと名付けられるが、この男児にオームは転生するという筋である。そして30年後に人気俳優として名を馳せるようになる。仕事の関係でムケーシュと出会うが、やがて過去の記憶が断片的に蘇り始める。

インド宗教の基本的観念の一つである輪廻の思想が使われてはいるが、この映画に組み込まれた輪廻転生は、行為（カルマ）の結果としての輪廻転生というわけではない。30年後に別の人間に生まれ変わったオームが、再び同じ人に魅せられるストーリーにしたてられている。輪廻転生の話がごく普通にストーリーに組み込まれるということがポイントになる。

(3) キリスト教文化

キリスト教文化は政治、教育、文学、芸術、美術など生活のあらゆる面に及んでいるので、極論すれば、ほとんどのヨーロッパ映画にキリスト教文化に関わるシーンを見出せると言える。しかしキリスト教にあまり詳しくない日本人に対しての教材として用いるときは、キリスト教会や修道会、修道院という組織、団体の活動が描写されている映画が導入としてはやりやすい。

ヨーロッパ社会の軸をなすキリスト教だが、その信仰形態は時代とともに変わる。とくに20世紀後半からはその変化は激しく、それは映画にも如実にあらわれている。それは神の描き方、イエス・キリストの描き方にもあらわれている。こうした変化の面に注意を促すことも大事である。

①ローマ教皇

ローマ教皇（法王）はローマカトリック教会の頂点に立つ。『ローマ法王の休日』²⁶は、コンクラーベでようやく選ばれた新しいローマ教皇が、それを嫌がって逃げ回るという、ほとんどありえない想定の話だ。コンクラーベは「鍵とともに」という意味のラテン語から来ている。13世紀後半に、教皇クレメンス4世死去後の教皇選挙が紛糾し、3年近く空位が続いた。これに不満を抱いた信者たちが、会場から出られないように鍵をかけて枢機卿たちを閉じ込めたのが起源とされる。コンクラーベの最中は、選ぶ役の枢機卿たちは隔離される。新法王が決まると白い煙が出て、決まらなかった場合は黒い煙が出るというシステムである。なかなか新しい教皇が決まらず、黒い煙が続けて出たのち、ようやく上った白い煙に見守る人々は歓喜する。しかし、選ばれたメルヴィルは、こともあろうに、新教皇としてバルコニーから人々に姿を見せるその直前に、大声をあげて、その場から逃げ去るのである。自分は教皇の任にはとうてい堪えないと悩み、ローマの町を逃げまわるのである。

映画の冒頭で死去した教皇の頭をハンマーで叩くシーンがある。コメディだからこうしたと思う人もいるかもしれないが、これも実は一つの儀式なのである。20世紀になってからは行われていないそうだが、かつてはこうして儀式的に死去を確認した。この役は、教皇が生前選んでいたカメルレンゴと呼ばれる枢機卿が行う。カメルレンゴは教皇の額を銀のハンマーで軽く叩いたのち、洗礼名で教皇を何度か呼ぶのがならわしであった。

枢機卿たちの描き方は、皮肉交じりである。選挙がなかなか決まらないので、暇をもてあまして、カードゲームをやったり、やたら酒を飲んだり、自転車をこいで体力をやしなったり、あるいはジグソーパズルに熱中する姿をみせたりする。果てはバレーボール大会が開かれる。

『法王さまご用心』²⁷はさらにありえない話である。ローマ教皇が突然死去し、次の教皇を選ぶこととなった。マフィアとつながっていた枢機卿のロッコが、アルビーニ枢機卿を推薦する。20カ国語が話せ、またアフリカの難民キャンプなどで活動していたという触れ込みにし、これが功を奏する。ところが耳の遠い書記官が名前をアルビーニツィと聞き違え

る。こうして枢機卿でもなく片田舎の修道会の司祭であったアルビーニツィが突然教皇に選ばれる。陽気にエレキギターを手に子どもたちの前で歌うなどの態度が修道院長の機嫌を損ね、そこを首になった直後のことであった。教皇ヨハネ・パウロ3世となったアルビーニツィは、就任の記者会見の場で、避妊はどう思うかという質問には「いいことです」と答える。女性司祭はどうかという質問には「大歓迎です」と答える。どちらも実際の教皇ヨハネ・パウロ2世が「ノー」であったことを踏まえておくべきシーンである。バチカン銀行の腐敗についての質問が出るに至って、周囲は会見を止める。後半はアルビーニツィと腐った枢機卿及びマフィア一味との闘いというストーリーだが、現実離れしたコメディの中に、けっこう鋭い批判が盛り込まれている。

こうした映画はある程度ローマ教皇の役割やコンクラーベの仕組みを知らないとなんが実際に何がフィクションが分かりづらい。事前の説明が必要であろう。と同時に、カトリックの頂点にある人物をこのようにいわば茶化して描けるという現代のヨーロッパ社会のありようにも留意すべきである。宗教家を描くときの自由度は国や宗教文化圏によって異なる。その違いを理解する方途を追究するのは宗教文化教育の課題の一つであるが、きわめて困難な課題であることは間違いない。

②修道会・修道院

カトリックが世界に広まる上で修道会や修道院が果たした役割は非常に大きい。日本にも多くの修道会、修道院がある。しかし、閉ざされた組織となることも多く、その内実は一般にはほとんど知られていない。ことに歴史的な経緯は理解が容易ではない。十分な理解には至らなくても、独特の雰囲気を感じ取るに役立つ映画はある。

『尼僧物語』²⁸は、オードリー・ヘップバーンが、カトリックの尼僧ルーク役を演じて話題となった。話は1930年代、ベルギーに住む女性ガブリエルは、医者の父をもち、看護婦として働いていた。しかしコンゴの病院で働くことを夢見て修道院に入ることを決意する。修道院でもらった名前が、シスター・ルークである。

カトリックの修道会は数多くあるが、共通する戒律は清貧、貞潔、服従である。物質的欲望を絶つ清貧と貞潔を守ることには揺らぎのなかったルークだが、服従という戒律が繰り返す彼女の試練となる。胸に秘めた個人的決意というものがあったからである。ラストシーンで、ルークが修道院を出るときの様子が静かに描かれる。修道会のウチとソトを厳しく分ける仕組みがよく分かる場面である。

「ドミニク、ニク、ニク」の歌詞で知られる歌は1960年代にレコードが発売され、世界で300万枚以上売れたという。その裏に何があったか、主人公の激しい人生が描かれているのが『シスタースマイル・ドミニクの歌』²⁹である。

ドミニクの歌は「シスタースマイル」という歌手名でリリースされた。本名をジャンヌ＝ポール・マリ・デッケルス（映画ではジャンヌと表記されている）という実在の人物をモデルにした話だが、どこまで忠実に描いているかは、むしろ注意が必要である。ただ彼女がドミニコ会の修道女となってからつくった「ドミニク」の歌が世界的にヒットしたのという点は事実である。実名を隠すためにスール・スーリール（英語で言えばシスター・スマイル）という名を使った。

映画では、彼女は自分の生きざまを貫こうとし、見方によれば悲劇的ともいえるような生

涯を送ったように描かれている。束縛の強い母と主体性のない父親という家で育ち、嫌気がさして、ある日突然ドミニコ会に属する修道院での生活を選ぶのである。しかし、個性の強い彼女が修道院の厳格な規律に沿って静かな生活を送るのは、所詮無理な話であった。修道院の食事が十分でなかったのか、空腹に耐えられず、勝手にパンにかぶりついて、罰を受けたりする。

彼女の運命を変えたのは大好きなギターであった。修道女になってからも、規則への反発を止めない彼女に、修道院長は「なぜ修道院に来たのか？」と問う。ジャーヌは「生きる意味を求めて？」と答える。「今のままでは無意味です」とつけ加える。修道院長は彼女がギターを弾くことを許す。

たまたま修道院を見学に来た一般の人を前にギターを披露したのがテレビで紹介され、それをきっかけにやがて彼女が創った歌のレコード化の話が進む。それが「ドミニク」である。これが思わぬ大ヒットとなるが、それが運命を狂わしていく。レコードがいくら売れても、それは修道会の収入になる契約となっていたのである。より自由な生き方を求めて、修道会を出てからは、苦難の道が彼女を待ち受ける。規律を守ることに基本がある修道院生活と本来自由に生きたかった女性とのぶつかりが、いろいろな解釈を許すように描かれている。

カトリックに限らず、聖職者を「疑う」ことは極力避けられようが、その疑いをテーマにしたのが『ダウト～あるカトリック学校で～』³⁰である。疑われたのは神父、疑ったのはカトリック教会が経営する小学校の校長である修道女。ここには2つのテーマが重ねられている。1つは1960年代にカトリックが向かい合ったりベラルな方針への転換という世界的課題。もう1つは、独身を守らなければならない神父という職につきまとう性的な誘惑という、現代なお続く問題。しかも神父への疑惑は、黒人の男子児童との関係についてであるから、さらに複雑な様相を呈する。1964年のニューヨークという、時代と場所が設定されているが、1964年は、ジョン・F・ケネディ大統領が暗殺された翌年であり、公民権運動の中心的人物であったキング牧師がノーベル平和賞を受賞した年である。そしてカトリック界にとっての大きな転換点であるヴァチカン第二公会議（1962～65年）が開かれている最中である。

話は3人の人物の心理劇的な色彩を帯びている。「疑い（ダウト）」の対象となったフリン神父は、教会に新しい風をもたらそうとしていた。説教もなかなか人気があった。神父が黒人の少年と性的関係をもったのではないかと疑うアロシマス校長は、これまでのやり方を踏襲しようとする修道女である。黒人の男子生徒と神父との関係に小さな疑惑を抱き、それを校長に告げたのは、学校で教えている若い修道女ジェイムズで、彼女はふたりのはざままで心が揺れる。どちらを信じるべきか。映画は一つの可能性を暗示しつつも、真実を明らかにしはしない。観客の判断にゆだねられる。

③神の描き方の変容

欧米の映画に描かれた神は、時代とともに神への観念の変化を反映している。興味深いのは、「ゴッド」が平凡な人間の姿をとって現れる映画が、1970年代以降アメリカ映画にいくつも見られるようになったことである。『オー！ゴッド』³¹では神は眼鏡をかけ野球帽をかぶった老人の姿で登場する。コメディアンジョーン・バエズが神様役である。神はみずか

らが神であることの証明として「GOD」と書かれた名刺を差し出したりするのであるが、なぜそんな格好になったかの説明も一応ある。本来は神に姿などないのだが、それだとわかりにくいだろうと主人公が受け入れることの出来る平凡な格好にしたというわけである。

この映画はシリーズ化され、1980年に続編の『オー!ゴッド2／子供はこわい』³²が製作され、さらに84年には『オー!ゴッド3／悪魔はこわい』³³が製作された。いずれもジョン・バエズが神様役で登場する。第三作では、バエズが神と悪魔の二役になっている。

少しスマートなかつこうな姿となって神が登場する映画が21世紀になって登場する。『ブルース・オールマイティ』³⁴である。2003年に制作されたこの映画では、主人公のブルース（ジム・キャリア）が「神よ、あんたは仕事をしていない」と悪態をついてしまったことが神の登場を招く。モーガン・フリーマン扮する神が「お前さんそう言うけれどこれでなかなか大変なんだぞ。なんならちょっと神様をやってみろや」とブルースに神の役を任せることとなる。ローカル・テレビ局の Reporter であるブルースは、こうしてドタバタ劇を始めることとなる。

この続編が2007年の『エバン・オールマイティ』³⁵である。神の役は同じくモーガン・フリーマンである。今度は、下院議員に当選したエバンが、新しい家を購入し、「神様、世界を変えるため、力を貸して下さい」と祈ったことが、神が登場する発端になっている。

この映画では毎朝セットした時間とは異なる6時14分に目覚ましが鳴るといった具合に、「614」という数字が謎めいた数字として用いられる。やがてこれは創世記6章14節を意味することが分かる。創世記6章14節はノアの箱船の話の一部をなし、「あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。」とある。このシリーズでは、神が白いスーツを着こなした黒人の姿をとってあらわれる。そして、神はふいに現れ、ふいに消えていく。まったくの気まぐれのようにみえる出現形態は、キリスト教における啓示の観念と符合しているようでもある。啓示は一方的に神の側からもたらされるからである。

④イエス・キリストの描き方の変容

神の描き方の変化はイエス・キリストの描き方の変化と並べて考えるのもいいだろう。「神の子イエス」から「人間イエス」、それも悩みを抱えた人間としての描き方が20世紀後半には顕著になる。それはまたイエスという人物の表象の変化にも関わりをもっている。

イエス・キリストの人間としての悩みや苦しみを描くような映画は1970年代から増えた。とくにミュージカル『ジーザス・クライスト・スーパースター』³⁶や、キリスト教教徒から激しい反発を受けた『キリスト最後の誘惑』³⁷などでは、イエスとマグダラのマリアとの愛が生々しく描かれ、従来のイエスを描いた映画とは大きく様相が異なってきた。エロスに満ちたイエス像が前面に出てきた。ヒット作となった『ダ・ヴィンチ・コード』³⁸はさらに踏み込んで、イエスとマリアとの間に子どもがいたという前提のもとにストーリーを展開させる。映画の各シーンは謎解きのスリルでつないでいるが、この前提も関心をもたらし一因であろう。

イエスの表象についての変化に関しては、2012年に國學院大學で開催された国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」³⁹でパネリストの一人 MacWilliams 氏（米国、セントローレンス大学）が、多くの画像を用いて示した。「イエス

の再生—映画、マンガ、アニメにおける救世主のポップカルチャー的変容—という発題において、同氏は白人イメージであったイエスが多様化してきていることを説明した。

『ライフ・オブ・ブライアン』⁴⁰はイエスは登場しないが、間接的にそのメシア扱いが皮肉られる。英国のコメディグループであるモンティ・パイソンが中心的な役を演じている。イエス・キリストが生まれたのとほぼ同時に、一つ隣の小屋でブライアンが生まれたという設定で始まる。ブライアンが自分の意思に反してメシアにまつりあげられて、あげくの果てに処刑されてしまう。救世主にまつりあげられる過程は、すこぶる簡単である。

ブライアンは、ローマ人に抵抗する「人民戦線ユダヤ」というグループにはいる。入会に際してある任務を命じられるが、それは壁に「ローマ人よ家へ帰れ」と描くことであった。ところが現場を見つかり、ローマ兵から追われる身となる。逃げる途中で説教者のまねをするが、ローマ兵をやり過ぎたので、説教を途中でやめてその場を去ろうとする。ところが話が「人々に与えられる」とまで言って終わったので、そのあとに重要な話が隠されていると思った人たちが、「何が与えられるのか」と問う。そして彼を神の子と思いつむ。自分はメシアではないと言うと、「本当のメシアだけが力を否定するのよ」と返され、メシアだと答えると「やっぱりメシアだ」と返される。ついにブライアンはメシアに祭り上げられる。

メシア崇拜もセクト間の争いも、ローマ人とユダヤ人の対立も、何もかも笑い飛ばす。茶化し方が半端ではない。いったんメシアとされると、何を言ってもそれがメシアの言葉としてありがたがられる。そういう人々のありようがもっとも揶揄されているわけで、これをどう受け止めるかで多分評価も大きく分かれる。コメディとはいえ、信仰を徹底して茶化しているわけであるから、なぜこうしたものを見せる必要があるかを、教える側が自問したのち教材とするのがよさそうである。

⑤神父と牧師

神父や牧師の描き方から、現代のキリスト教が抱える問題が見えてくる。『ヤコブへの手紙』⁴¹は、登場人物も少なく、静かな老齢の牧師の生き様が描かれる。宗教家はなんのためにいるのか？人と人とのメッセージの交換の中で、救われているのは誰か？そうした問いかけが底にある。

殺人罪で終身刑となっていたレイラが恩赦で出獄する。引き受け人となったのが、年老いた牧師のヤコブ。暗い過去のレイラは、盲目のヤコブ宛の信者たちからの手紙を読むことを依頼される。ヤコブはレイラに常にいたわりの言葉をかける。だが心温かいヤコブによってレイラの心がしだいにほぐれるといったようなありきたりのストーリーではない。牧師として、神と人をつないできたと思ってきたヤコブ自身の深い悩みが描かれていく。それとともに、重い凍ったような心の扉をもつ人が、どのようなときに、それをかすかに開いていくのか。そのありようが丹念に描かれている。

タイトルの「ヤコブへの手紙」は、新約聖書の一書である「ヤコブの手紙」を連想させる。イエスの兄弟が記した書簡とされる同書には、信仰に基づく行いのあり方が説かれている。しかし、その内容を知らずとも、この映画が訴えることは伝わる。北欧のキリスト教文化の今を考えるに適した映画であろう。

⑥特徴的な教派の理解—アーミシュの例

プロテスタント教派の中には、監督派、会衆派、長老派といった主流派に属するような教派の他に、かなり特徴的な教えや信仰実践をする教派がある。アナバプテスト派（再洗礼派）に含まれるアーミシュやメノナイトなどもそうである。再洗礼派は本人の意志に基づかない幼児洗礼を拒否する。米国のペンシルバニア州には、アーミッシュの中でも伝統的な生活様式を守ろうとするグループが今でも多く住むことで知られている。近代文明の利器を退け、移動には馬車を使い、家では電気を使わないなどの独特の生活を送る。このアーミシュの生活場面が出てくるのが『刑事ジョン・ブック 目撃者』⁴²である。

ハリソン・フォードが刑事ジョン・ブック役を演じているが、彼が担当した殺人事件にアーミッシュの母子が絡む。彼らの宗教信条を示す場面が何度か出てくる。アーミッシュはヨーロッパで迫害を受けたため、18世紀前半以後、アメリカに移り住む者が相次いだ。ドイツ語圏から来た人が多く、映画でもドイツ語での説教や会話の場面がときおり出てくる。また非暴力主義も広く知られ、アーミッシュの村に隠れ住むことになった刑事のブックも拳銃を手放す。そうした彼らの生き様がラストシーンに取り入れられている。

『大富豪、大貧民』⁴³もアーミッシュの宗教生活が描かれる。アーミッシュの村に紛れ込んだ俗っぽい社長夫妻のドタバタぶりを描いた喜劇である。大会社社長のブラッド・セクストンは、金儲けに夢中で宗教など馬鹿にしているが、お抱えの会計士が金を使い込み、脱税を疑われ国税局の追及を受ける羽目になる。妻との逃亡の旅をする羽目に陥り、ペンシルベニア州にあるアーミッシュの村にたどり着く。ふたりは信者になりすまし、そこでの生活を始めるが、近代生活を拒否して農作業にいそしむ彼らの生活についてゆくのに苦勞する。アーミッシュではないことがばれそうになるのを、なんとかつじつま合わせする場面が愉快だが、しかしアーミッシュたちは、実はとうに見抜いていた。原題の For Richer or Poorer は、キリスト教式の結婚式のときによく使われる「富めるときも貧しきときも」という文句である。それが邦題に活かされていれば、この映画に込められた笑いの中の教訓が、読み取りやすくなったはずである。「大富豪、大貧民」では趣旨が分かりにくい。

⑦キリスト教原理主義と進化論

キリスト教原理主義は科学と宗教の関わりという観点から見逃せない動きである。とくにアメリカにおけるキリスト教原理主義（ファンダメンタリズム）の問題を考えると、『風の行方』⁴⁴は是非参照すべき映画である。これはスタンリー・クレイマー監督の『聖書への反逆（風の遺産）』⁴⁵をリメイクしたものである。1925年にアメリカ・テネシー州の町デイトンで実際に起こった事件を題材にとっているが、舞台となる町や関係者の名前は変えてある。問題となった裁判は俗に「スコープス・モンキー裁判」と呼ばれているが、進化論をめぐる生物教師と聖書に記されたキリスト教の教えを文字通り信じようとする人たちとの対立がテーマである。

教師のケイツが学校で進化論を教えたため、逮捕され裁判にかけられる。聖書の教えに反する理論を教えるはならないという州の法律に違反したという理由である。ボルチモア・ヘラルドの記者が、田舎の町の後進性を話題にできるいい機会ということで、裁判の取材にやってくる。一方、3度も大統領選挙に出馬したことのあるブレイディが原告側弁護士に加わる。彼は聖書に書かれている一言一句を信じる熱心なクリスチャンである。

裁判ではケイツの弁護士ドラモンドとブレイディとのやりとりが中心となるが、科学者を証人とすることを拒否されたドラモンドは、なんとブレイディを証人に求める。ここが映画の圧巻で、ドラモンドは聖書に関する質問を、次々とブレイディに投げかける。ヨナがくじらに呑み込まれたという話を信じるのか。ヨシヤが太陽を止めたという話を信じるのか。創造のときはいつか。一日目はどれくらいの長さであったか。太陽もできていなかったのに、一日の長さが分かったのか。聖書に書かれていることが実際に起こったというなら、当然起こるであろうような疑問を次々とぶつける。ブレイディは答えながらしだいに興奮していく。創造のときは紀元前 4004 年 10 月 23 日であると断言する。裁判自体はケイツの有罪で終わるが、罰金わずか 100 ドルであった。

この映画のもとになったデイトンでの裁判では、科学と宗教の立場の違いが、創世記をめぐって際立ち、キリスト教原理主義者と言われる人たちの認識が浮き彫りにされた。スコープスは実際に被告となった高校の生物教師の名前で、モンキー裁判と呼ばれるようになったのは、人類の先祖が猿であるかどうかという形で話題になったからである。

実際の裁判も映画と同じく原理主義者たちが勝訴している。しかし、原理主義者たちの時代遅れの認識があらわにされてしまった。米国では 20 世紀後半にプロテスタントのリベラル派の信者が減少気味になったのに対し、福音派と呼ばれるようなグループは増加傾向にあるとされる。その福音派には原理主義的傾向が強いものが含まれる。そうした一つの教会に焦点を当てた非常に興味深いドキュメンタリー映画が『ジーザス・キャンプ～アメリカを動かすキリスト教原理主義～』⁴⁶ である。ブッシュ政権の時代に制作された。保守派のサミュエル・アリートが合衆国連邦最高裁判事に任命されて、リベラル派が危機感を感じた頃である。

ドキュメンタリー風のこの映画で中心的に扱われているのは、ミズーリー州のベッキー・フィッシャーという女性牧師が主催する子どもを対象とするサマーキャンプの様子である。進化論を否定し、墮胎に反対する。「アメリカをキリストの手に取り戻そう」というスローガンを繰り返す。

彼らは子どもたちへの教育が宗教界の将来の動向に非常に重要な意味をもつことを自覚し、さまざまな道具を使って、自分たちの信念を子供たちに伝える工夫をする。敵か味方かと、常に明確な二分法を突き付ける。一部の子どもたちは思惑通りその枠で考えるようになる。用いる小道具は人間の認知をうまく利用したものである。敵への攻撃を形としてあらわすために、子どもたちに金槌を渡しコップを割らせる。攻撃心を具体的な行動によって植えつける手段である。墮胎への嫌悪感を強めるために、妊娠後の月数に対応した胎児のおもちゃを見せる。キリスト教原理主義には欧米でも強い危機感を抱く人がいるので、こうした映像を教材とする場合は、そのことにも触れた方がいいだろう。

ドーキンス⁴⁷をはじめとした科学者側との進化論をめぐる論争に不利を感じ取った創造論者の一部は、1990 年代あたりからインテリジェント・デザイン (ID) 論によりどころを求めるようになった。ID 論とは、生命や宇宙の不思議な仕組みを「何らかの知的な設計者」によるものと考えようとする立場である。神を言い換えただけという批判もある⁴⁸。この ID 論に対抗して、オレゴン州立大学卒のボビー・ヘンダーソンが 2005 年に作ったのが「空飛ぶスパゲッティ・モンスター教」である⁴⁹。ID 説が教育の現場に採用される事態が生じたことに対する抗議としてのパロディ教団である。唱え言葉は「アーメン」ならぬ「ラーメ

ン」である。あえて馬鹿馬鹿しい教義を打ち出して、挑発しているのである。こうした厳しい対立がある現実もまた認識しておく必要がある。

(4) イスラーム

イスラームは偶像崇拝を禁止するので、ムハンマドを扱う映画の制作は困難である。『ザ・メッセージ』⁵⁰はムハンマドの生涯を扱った稀有な映画である。ムハンマドの説いた教えが、多神教の町メッカでどう広がっていったか、どのような波紋を周囲にもたしたのなどを交えつつ、ムハンマドに従った人々の信念の深さが描かれる。商人たちでにぎわうメッカの物質主義と、それに対応した多くの神々への崇拜。そこに突如あらわれたムハンマドの教えは、多くの人々に衝撃的であったが、若者を中心に帰依者が現れる。彼らはムハンマドを通じて次々と下される新しい啓示に引きこまれ、親たちを説得していく。

だが偶像崇拝禁止を配慮してのことと考えられるが、映画の中ではムハンマドの姿も声も出てこない。彼と接した人々の表情を描き、彼の発した言葉をなぞる人々を通して、彼が何を行い何を語ったかが間接的に示される。

『ハーフェズ ペルシャの詩』⁵¹は、イランと日本の合作映画で、麻生久美子が主演のイラン人女性ナバートを演じたことで注目された。タリーカと呼ばれるスーフィ教団の規則が重要な柱となる。シャムセディンは小さいときからタリーカでコーランをすべて暗唱する修行をしていたが、試験に合格した。そして、コーラン暗唱者だけに与えられる称号ハーフェズを獲得する。ある日、宗教家の娘ナバートにコーランを教えることとなる。ふたりは会話しながら視線を交わしたが、このごく普通に思われる行為がこの教団では戒律違反で、大きな問題となる。シャムセディンはハーフェズの称号を剥奪されてしまう。さらにナバートは、父のもとで学ぶ男と結婚させられることになる。

イスラームの戒律は地域により厳格さに差がある。イランはシーア派が国教であり、現在は戒律は厳しい方に属するが、その厳しさは時代により揺れ動く。ハーフェズの称号は、14世紀イランの詩人ハーフェズから来ている。彼は愛にまつわる詩を数多く作ったことで知られ、家にコーランはなくてもハーフェズの詩集はあると言われていたほどイランでは人気がある。宗教の戒律が人間の愛を押さえ込んでいることへの静かな抵抗の映画とも解釈できる。

アヤトッラー・ホメイニに主導された1979年2月のイラン・イスラーム革命は、西洋世界にも大きな衝撃をもたらした。『ペルセポリス』⁵²は、この革命前に生まれ、革命後に成長期を迎えた女性の目から描かれたアニメ映画である。主人公のマルジャンは、活発でブルース・リーの映画が大好きな少女。しかしホメイニに率いられた革命で、自由が急速に失われていくのを実感する。

知り合いの女性が来て嘆き悲しむ場面がある。息子が学校で鍵を渡され、戦争で名誉の死を遂げたら、この鍵で天国に行けると教えられたという。それはプラスチックの鍵だった。「天国にはごちそうが並び女にも困らない。金とダイヤモンドでできた家もある」と教えられたという。彼女は言う。「大変な思いをして5人の子を育ててきたのにこんな鍵と引き換えに長男を奪われるとは。ずっと信仰に忠実でした。ちゃんとヴェールを被り祈ってきたのに、これが答えならもう何も信じられない。」

イラン・イラク戦争が始まり、女性に対する戒律遵守も厳しく迫られる。マルジャンの将

来を案じた両親は、彼女をウィーンへ留学させることにした。最初は楽しんだマルジャンだが、しだいに壁を感じていく。そしてテヘランの家族の元へ戻る。戦争は終わっていたが、百万人が死亡した。スカーフの長さが短いと批判され、未婚の男女が手をつないただけで鞭打ちにあう。面倒くさくなって結婚するがすぐ離婚。祖母が最初の結婚は予行演習と慰めるのがたくましい。しかし母に勧められフランスへ旅立つ。このあたりは恵まれた環境のわがままな女性の半生という印象もありうる。全体としては革命後のイランで、宗教的な締め付けが厳しくなったことへのあきらめが強く漂う。

『アルゴ』⁵³はイラン・イスラーム革命の年の11月に起こったイランの米国大使館占拠事件に基づいて脚色された話である。冒頭でそこに至る経緯が短く説明される。西欧化を進めつつ、自らは贅沢な生活をしていたパーレビ国王がイラン国民の怒りを買ったこと。ホメイニに率いられた革命の前に、パーレビ国王がエジプトに亡命し、最終的に米国に移住したこと。そして国王の引き渡しに米国が応じず、これにイラン国民が怒ったことである。

映画は怒れる民衆が米国大使館に押し寄せる場面から始まる。大使館の敷地は治外法権であるという国際常識をまったく無視して、多くの人が大使館内になだれ込み、そこにいた人々を人質にとる。そのとき間一髪でカナダ大使館に逃げ込んだ6人の米国大使館員の救出劇が中心的ストーリーである。CIAで人質救出が専門のメンデスが単独イランに乗り込み、6人の救出にあたる。そこでとられたのがまことに奇抜なアイデアであった。「アルゴ」というSF映画を撮影するためにカナダからの撮影隊がイランにやってきたと欺いて救出しようとする。この映画におけるイランの描き方は当然イランには強い反感をもたらした。2013年のアカデミー賞作品賞の他、2012年のゴールデン・グローブ作品賞を取ったことなどは、この反感をいっそう強める結果になった。つまりはイスラームフォビアを刺激しかねない要素も含んでいるわけで、この点には要注意である。

Ⅲ. グローバル化と宗教文化—移民社会と宗教

日本ではグローバル化が1980年代以降、急速に進行する。それは外国人労働者の増加、留学生の増加、国際結婚の増加など各種のデータから見ても明らかである。グローバル化の定義からして、むしろそれは日本に限ったことではない。20世紀後半から21世紀にかけては、国際化さらにグローバル化の影響が、各国の宗教文化にも顕著に及んでくる。移民の多い国ではそれがどんな形になって表面化するのかを考えさせる映画が増えてきている。

『僕の国、パパの国』⁵⁴は英国で生活しているパキスタン系一家がテーマである。パキスタンからの移民である夫と英国人の妻、その間に生まれた六男一女がさまざまな問題を起こす。ファストフード店を営む父親は、子どもたちの人生をムスリムとしての自分の思い通りに育てたいと考えている。ところが父が勝手に決めたパキスタン系の移民の娘との結婚に反旗を翻す息子や、こともあろうに同性愛者であることが明らかになった息子も出てくる。末息子の割礼問題では大もめ。子どもたちとの文化差は開く一方となり、子どもの幸せを第一に考えようとする妻との関係もぎくしゃくしていく。

英国は戦前に南アジアなどに植民地があったことが関係し、アジア系の移民が多い。ヒンドゥー教徒やムスリムも多く、彼らがもつ独自の宗教文化とどう向かい合うかは、英国の宗教教育においては大問題である。キリスト教以外にもユダヤ教、イスラーム、仏教などを学ばせる多文化教育を積極的に推し進めている。だがこの映画のように、家庭内に複数の文化

が混在するときは、異なる文化との共存、共生というような理念をもってしても、なかなか処理できないような入り組んだ感情的問題が生じる。イスラームでは同性愛は非常なタブーであるし、食品はハラールであるかどうかが問題である。しかし移民二世、とくに母親が生まれながらのムスリムでないとするれば、移民してきた世代にとっては当然の感覚も、よほど失われてしまう。宗教文化のズレが世代間で発生するという問題は、どこでも生じうるゆえ、特殊な事例を通して一般的な問題を考えていくというのに適した映画である。

米国は移民によって形成された国であるから、宗教文化の問題も多様な姿をとってあらわれる。『アリ ALI』⁵⁵ は、「蝶のように舞い、蜂のように刺す」という言葉で一世を風靡した元プロボクサーのモハメッド・アリの半生を描く。ウィル・スミスがアリ役である。アリはムスリムとしてのこの名前をもらう前は、カシアス・クレイという名であった。

当然ながらボクシングの場面が多くを占めるが、黒人への人種差別を扱い、ムスリムとしての思いを扱っていて、彼のボクシング人生の理解にもこれらが重要な意味を持つことが分かる。アリは1964年にヘビー級王座に就くが、その翌日ブラック・ムスリムの団体であるネイション・オブ・イスラームのメンバーとなる。そして指導者のイライジャ・モハメッドから、モハメッド・アリという名をもらったのである。ネイション・オブ・イスラーム⁵⁶ は当時、なかなか過激な主張を掲げていた。マルコムXもこの教団に属していたが、この頃離脱してスニー派に属するようになった。マルコムXとも親交のあったアリは、翌年にマルコムXが暗殺されたことに大きな衝撃を受ける。アリ自身ものちスニー派に属する。アリはベトナム戦争さ中に、自分を差別する国の側に立って、関わりのないベトナム人を殺すことはまっぴらであると宣言する。当初有罪判決が繰り返されるが、最高裁でくつがえり、良心的兵役拒否が認められる。黒人、そしてムスリムという、アメリカ社会では二重に覆いかぶさる差別との闘いが描かれる。

『マイ・ビッグ・ファット・ウェディング』⁵⁷ はシカゴに住むギリシャ系アメリカ人女性トゥーラの結婚にまつわる話を中心である。ギリシャ系住民のアメリカにおけるマイノリティ感が分かってくる。

強調されているのは、ギリシャ系の人たちのギリシャの文化や宗教への愛着である。冒頭部分で、ギリシャ娘の三つの義務についてのナレーションがある。それは、「ギリシャ男と結婚すること」「子どもを産むこと」「死ぬまで家族の面倒をみる」である。トゥーラの幼少期の回顧で、父が娘とその友だちを車で学校に送りながら、ギリシャ文化を誇らしげに語るシーンがある。天文学、哲学、民主主義はギリシャに始まったと言い、すべての語源がギリシャ語であると主張する。「アラクノフォービア」を例に、アラクノはギリシア語でクモでフォービアは恐れ。だからクモ恐怖症となると説明する。娘の友だちがからかい気味に子供たちに「キモノ」の語源はと聞くと、「ヒモナ」(=冬)であり、寒いとき着物を着るからとこじつけを答える。

こうした家庭に育ったトゥーラだが、知的で好奇心が強く、そうしたことに違和感もっている。トゥーラはある日、働いていたレストランで、友人と語っていたイアンを一目見て心奪われる。やがて、イアンも彼女が気に入り結婚を申し込む。しかし、ふたりの文化的、宗教的障壁が立ちふさがる。少なくともギリシャ正教の信者でなければ結婚を許さないというトゥーラの父に、イアンは信者となることを受け入れる。浸礼という全身洗礼の場面が出てくる。イアンの両親がリベラルであったから、ハッピーエンドになったわけで、リベ

ラルな生き方の存在意義が隠し味になっていることも見逃せない。

『ゴッド・イン・ニューヨーク』⁵⁸は、微罪で留置場に送られた男たちによる会話部分がほとんどの場面を占める。後半の宗教や民族問題をテーマにしたやりとりは、どぎついほどである。自称ミュージシャンの黒人、プエルトリコ系の彼の友人、この2人に乗車拒否したアラブ系タクシー運転手、音楽関係の制作会社で働くアジア系ビジネスマン、その同僚のイギリス人、さらにユダヤ系、イタリア系、刺青師のアイルランド系の人物という構成で、英国人を除き皆米国人。この顔ぶれから当然予想される対立があり、また実際そのようにストーリーが進む。

「アラーを信じろ。神は慈悲深い」というアラブ系に、ユダヤ系が「なぜ俺と争う」と反論。「お前の先人は片手に和解の印を持ちながら、もう片手には剣を持っていた。野蛮な民族だ」とののしる。「カトリック教会はよそに口出ししない」というカトリック教徒に、英国人が「祖父がIRAのメンバーに殺された。カトリック教会が無実だなんていうなよ」と反論する。「白人は黒人の国に押し入ってきて、キリスト教を強要したと認めるべきだ。俺らの国に聖書を持ち込んだ。聖書を押し付け国を乗っ取った。」と黒人が主張する。

果てしない応酬が続き、偏見に満ちたやりとりへとエスカレートする。神の嘆きはこうだ。「愛し合う能力を与えたのに、いがみあっている。」原題はGod Has a Rap Sheet、つまり「神は前科がある」というなかなか刺激的なものである。米国の宗教事情の基礎知識がないと面白さは半減するだろう。

『マイネーム・イズ・ハーン』⁵⁹は、インドにおけるヒンドゥー教徒とムスリムの反目、9.11が米国のイスラーム系住民に与えた影響、そしてアスペルガー症候群という、いずれも重い問題が詰まっている。アスペルガー症候群のハーンは、たびたびいじめにあいながらも高い知能を見出されて育つ。先に米国に行った弟の伝手で、米国に移り住む。そこでヒンドゥー教徒のマンディラに一目惚れして、求愛を続けて結婚する。マンディラは離婚していて一人息子サミールがいる。幸せな日々が続いていたときに、悪夢のような「9.11」の事件がニューヨークで起こる。サミールがハーン姓になったことが一因でいじめられ、サッカーボールを腹部に蹴りこまれ、それが原因で死亡する。激しいショックを受けたマンディラは、ハーンに対し大統領に自分はテロリストではないと伝えるまで家に帰るなど言う。かくてハーンの奇妙な旅が始まる。差別は受ける側の視点が提示されないと、なかなか分かりにくい。これを自分たちの国で起こっている問題につなげていくのも宗教文化教育の課題の一つである。

ヨーロッパにおいてはムスリムの移民が多く、国でさまざまな問題を生んでいる。『おじいちゃんの里帰り』⁶⁰は、戦後のドイツにおけるトルコ移民の話をおさえて観た方がいい。監督のサムデレリはトルコ系ドイツ人2世の女性である。妹とともに実体験を基に制作したというだけあって、リアルな描写がちりばめてある。ごく普通のムスリムが持っているキリスト教へのイメージが、随所に示されている。

今はもう老人となったトルコ人移民一世のフセインがドイツに来ることになった経緯と、故郷への里帰りの旅のいきさつ、つまり過去と現在とが交互に描かれる。多くのトルコ系移民がドイツに押し寄せた1960年代、100万1人目のドイツ入国労働者となったフセインは、ドイツでの生活を選び、妻と子供3人をドイツに呼び寄せる。

ドイツに行くときに、近所の人がかけた言葉を通して、当時のトルコ人が描いたドイツへ

のイメージが描かれる。ドイツにはジャガイモしかないというのは愛嬌としても、豚だけでなく人も食うと警戒の言葉を投げる。豚のタブーとイエス・キリストの磔のイメージ、ぶどう酒のミサなどが、彼らにとってキリスト教の警戒すべき面を代表する表象であつたらしい。明治初期の日本人の中にも、ぶどう酒を血と勘違いした人もいるというから、ぶどう酒は似たような誤解を生みやすいということか。

一家が車で旅立つときもそうであるが、見送る人がバケツで車が去ったあとに水をまくシーンが何度かある。これは水がすぐ蒸発して元通りになるように、それくらい早く帰れるためのまじないのようだ。こういう細かな描写も面白い。また十字架上の傷ついたイエス像は、ムスリムの子どもたちにとっては、恐怖の対象でしかない。孫娘の恋人が英国人であることをめぐって、せめてドイツ人なら、という家族たちの反応がある。トルコにとって英国のイメージはドイツより悪いようだが、これはオスマントルコ時代の歴史が関係している。

移民は一世、二世、三世となると、一般に元の国より住んでいる国へのアイデンティティが強まる割合が高くなる。言葉、宗教、スカーフ、服装、髭など。しかし同じ一世でもフセインはトルコ人としてのアイデンティティが強いのに対し、妻はドイツ国籍をとれて大喜びするような心境である。最初はキリスト像が怖かった二世にあたる次男も、クリスマスを祝ってくれと親にせがむようになる。三世であるフセインの孫になると、トルコ語も満足にしゃべれる。

最後に墓の話が出てくる。旅の途中でフセインに突然に死が訪れる。ドイツ国籍をとったがために、トルコでは外国人墓地に埋葬しなければならないという現実。それでも家族はフセインの思いを汲んだ選択をする。移民と宗教。重い問題も関わってくるのだが、それを軽やかに、そして日常的な出来事に即して描いていて、とても良質の映画である。

IV. 宗教対立と宗教紛争

宗教文化教育にとって、宗教がもたらす葛藤やその負の面への目配りは重要な課題である。その観点から宗教紛争をテーマにした映画と、「カルト・セクト問題」に注目してみる。

(1) 宗教紛争

国際的な紛争、あるいは一国内の民族対立などに宗教問題が絡むことは珍しくない。それらは宗教紛争と総称されることが多いが、宗教紛争と呼ばれるものの中にも、主たる紛争の理由は民族問題であつたり、国境紛争であつたり、経済的な問題であつたりする。しかし、宗教が絡むことで問題が複雑化する傾向が強いのは事実である。具体的な問題を扱った映画は、事態の複雑さへの想像力を養うことができる。

①パレスチナ紛争

宗教紛争の代表とされがちなパレスチナ問題を扱った映画は多い。『パラダイス・ナウ』⁶¹は、自爆テロと殉教との関係を考えさせる。2005年のベルリン国際映画祭でヨーロッパアンフィルム賞、また同年のゴールデン・グローブで外国語映画賞を受賞した国際的評価の高い映画である。ヨルダン川西岸地区は、1967年の第三次中東戦争以来、イスラエルによって占拠されている。その西岸地区の町ナブルスに住む2人の若者、サイドとハーレドが自爆攻撃の実行者に選ばれてからの二日間が描かれている。アサド監督はイエス・キリストの生まれ育った地とされるイスラエルのナザレで生まれたが、19歳のときにオランダに移住し

たという経歴をもつ。

自爆テロが解決への道でないことは明らかであるが、そうせざるを得ないを信じさせる論理を補強するものとして、端々でイスラームの教えが用いられる。司令した男は、「殉教したらどうなる？」というハーレドの質問に、「2人の天使が迎えに来る」と答える。殉教は正義であり、神は正義を愛するという言い方も出てくる。だが、イスラームの教えがこうした行為をもたらすと短絡的に解釈するのは早計であろう。似たようなロジックはここ日本にも顔をのぞかせている。「平和ボケ」などという表現を織りませ、外国への敵対心を煽るような人はここかしこにいる。それがどのような道に通じているのか、この映画はそれを考えるよすがともなる。

『パレスチナ 1948 NAKBA』⁶²もパレスチナ問題に関して必見の映画と言っていい。なるべく事実に即して描こうという姿勢がはっきりしている。広河隆一監督がみずから取材した40年にわたる写真と映像を編集したもので、アラブ人、ユダヤ人の双方に多くのインタビューがなされている。広河監督はキブツダリアで1年間働いていたのだが、しかし、やがてそこがもともとアラブ人の村ダリヤトルーハの土地につくられたものであることを知った。そして土地を奪われた人たちの取材を始めたのである。映画のタイトルになっているNAKBAとは、大惨事を意味する。これはむろんアラブ人にとっての大惨事である。

アラブ人だけでなく、イスラエルのマツペンのメンバーにもインタビューする。マツペンは1962年に設立された組織で反資本主義、反シオニズムを旗印に掲げていた。アラブ人を追放したり、虐殺したりする政策には、当然反対であった。

この映画はその原点を1948年に起こったタントゥーラ村での出来事に求め、さまざまな証言をインタビューによって引き出す。ナチスによって大虐殺を経験したユダヤ人が、なぜパレスチナの地で迫害者となるのか。そこにはパレスチナは神よりイスラエルの民に与えられた土地だという旧約的信仰が存在する。

『撤退』⁶³は2005年にガザ地区からイスラエルが撤退するときの話だが、話はフランスから始まる。前半の伏線はややわかりにくい。後半部分でのガザ地区で起こる出来事の描写が重要である。イスラエルがパレスチナ側に配慮しようとするときの、イスラエルの入植者たちの反対。そこでのユダヤ教の宗教的指導者であるラビたちの振る舞いも描かれている。

『シリアの花嫁』⁶⁴はゴラン高原に住む一人の女性の結婚をめぐる政治、民族、宗教などの要素が渾然一体となった複雑な問題を描く。2004年モントリオール世界映画祭グランプリ作品である。ドルーズ派という日本人にはあまりなじみのない宗教名が登場する。ドルーズ派はドルーズ教と呼ばれることもあるが、イスラームの一派で今から千年ほど前に形成され、シリア、レバノン、イスラエルに散在する小さな教派である。この教派に属する一家の娘が結婚することになる。

モナはゴラン高原のマジュダルシャムス村に住む娘である。ゴラン高原はもともとシリア領であったが、1967年、第3次中東戦争の際、イスラエルが占拠した。以後国際的に認められていないが、イスラエルによる占領状態が続いている。花婿となるタレルは境界線（軍事境界線）の向こうのシリア側に住んでいる。それは通常の国境ではない。いったん、その境界線を越えたなら、家族の住む側、つまりイスラエルが占領する地域には帰ってこれない。国家、民族、宗教。本来人びとを結びつけるはずであったものが、それを少しはみ出しただけの人間に対しては、執拗とも言えるチェックの機能を帯びてしまう。そのやりきれな

さと、しかし、それに立ち向かうとくに女性の強い心が描かれている。

②北アフリカ関連

北アフリカにあるアルジェリアはイスラーム圏の国だが、1830年から1962年までフランスの植民地であった。『神々と男たち』⁶⁵は1996年3月にアルジェリア南部の町チビリヌで実際に起こったトラピスト会の修道士殺害事件を題材にとっている。イスラーム過激派が近辺でテロを拡大させていく中での、修道士たちの心の揺れ動きを中心にストーリーは展開する。彼らは宗教の違いにこだわることなく、病人に薬を施し、生活を支える活動を続けていた修道士たちは地元の人たちからの信頼を勝ち得ていた。

あるとき、イスラーム武装グループが負傷した仲間を治療しろと修道院に押し入る。そのリーダーと修道院のリーダー的存在の人物とのやりとりは、「啓典の民」同士が争っているという現実をありありと描き出す。修道士はコーランの一節を引いて毅然と武装グループのリーダーに対峙する。「“信仰者”に一番親愛の情を抱くのはキリスト教徒たちである。それは彼らの間に司祭と…」。すると、過激派のリーダーがその言葉を引き継ぎ、「司祭と修道士がいて彼らが傲慢でないためである」と述べる。この文章はコーランの5章（食卓）82節に出てくるものである。

修道士は「だから私たちは隣人だ」と述べる。それを聞いて危害を加えることなく去ろうとするリーダーに対し、修道士はその日が特別な日、つまり「平和の王子、イーサー」の誕生日であると告げる。これに対し、リーダーは「イエスカ」と言葉を返し、そのような日に乱暴にふるまったことをわびる。コーランの中ではイエスも預言者の一人として扱われている。イエスはマシーフ・イーサー（救世主イエス）と表現されている。神の啓示を人びとに示した存在として認められているのである。

『約束の旅路』⁶⁶は、エチオピアに住んでいたファラシャと呼ばれる黒人のユダヤ人たちの過酷な運命を扱っている。実際に起こった出来事を踏まえており、中東の政治と宗教の複雑さを思い知らされるような映画である。ファラシャをイスラエルに移住させる「モーセ作戦」⁶⁷が1984年11月に始まった。しかし当時エチオピアは移民を禁止していたので、3ヶ月間続いたこの作戦は大きな困難に直面した。そこでとられた方法は、彼らをエチオピアの北西に隣りあうスーダンの難民キャンプに連れてゆき、そこから空路でイスラエルに連れて行くというものである。

主人公のシュロモは、実はユダヤ人ではなかった。母が息子だけでも救おうと、子どもを亡くしたばかりの別の母親に託してイスラエルへ送ってもらった。託された女性も病死したので、シュロモはフランス系ユダヤ人の里子として育てられることになる。割礼の場面があるが、シュロモは当然ながら割礼を受けていなかった。実はユダヤ人でもムスリムでもなかったからである。割礼は一般に幼少期に行なわれ、ユダヤ人やムスリムにとっては、重要な儀礼である。その根拠は旧約聖書（ヘブライ語聖書）にある。創世記17章12節には、「あなたたちの男子はすべて、割礼を受けなさい。生まれてから八日目に割礼を受けなければならない。」という記述がある。神からこのように命じられたアブラハムは息子のイサクに割礼を施す。コーランには割礼の記述はないが、アブラハムの宗教の一つであるイスラームではムスリムは少年時代に割礼する。

黒い肌のシュロモはイスラエルでいろいろな差別を受ける。決して見逃してならないのは、若者たちによる討論会の場面である。討論会の課題は「アダム肌の色は何色だった

か？」というものであった。シュロモの討論の相手となった若者は、神は白人を創ったと主張する。旧約聖書の記述に基づき、ハムの長男がクシュ、それがアフリカの黒人クシになったと論を展開する。自分の番になったシュロモは「初めに言葉があった」と切り出す。そして「神は一人一人の人間を信じ、人間に言葉を託した」と。神はアダムを粘土と水から造り、言葉のように命を吹き込んだから、アダムの肌は粘土の色の「赤」だと述べる。終わると場内からは拍手が沸き起こる。

創世記1章27節には、「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」とある。さてではどこまで細部に神は人のかたちを決めたのであろうか。そうした問いが生まれる。この箇所はそれに関連する場面である。映画が神学的問題にも踏み込んでいるいい例である⁶⁸。

③北アイルランド紛争

北アイルランド紛争はカトリックとプロテスタント（英国国教会）が絡む紛争である。キリスト教人口が少ないこともあって、日本ではカトリック、プロテスタント、オーソドックスの違いと、その間の確執の歴史はあまり実感をもって受け止められていない。しかし、ヨーロッパではこれらの違いはきわめて大きい。歴史的な対立はときに戦争にも至ったわけである。「なぜ同じ宗教なのに争うのか」といった類の質問はナイーブすぎることに日本人も気付かなければならない。

北アイルランド紛争をテーマにした映画は、当然ながら重苦しいものになるが、対象とした時代と局面の違いへの斟酌がとくに重要になる。北アイルランド紛争は多くの犠牲者が出たし、カトリックと英国国教会の対立が絡むので、深く問題の根を掘り下げようとする映画がいくつかある。

アイルランドには紀元前からケルト人が移り住んでいたが、聖パトリックと呼ばれる人物により、5世紀にこの地のカトリック化が推進された。聖パトリックは現在、アイルランドの守護聖人である。英国がアイルランドへ政治介入を始めるのは12世紀である。16世紀、宗教改革を行なった国王ヘンリー8世は、英国国教会をアイルランドにも強要した。アイルランド人の多くがこれに抵抗したが、エリザベス1世を継いだジェームズ1世はアイルランド全土を統治し、国教会に属する教会を多く建てた。これが現在の北アイルランド紛争の淵源と言える。

『麦の穂をゆらす風』⁶⁹は2006年のカンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞を受賞した作品である。19世紀から20世紀に起こった北アイルランド紛争の渦中で起こった出来事を、若者たちの行動に焦点をあてて描く。当時英国の支配下にあったアイルランドでは、独自の言葉であるゲール語を話すことを禁じられていた。アイルランドと英国の激しい戦いの後、英国が停戦を申し入れたので、1921年2月に和平条約が締結された。アイルランドは自由を手に入れたかに見えたが、中途半端なその講和条約が、今度はアイルランドの内部での対立を招くこととなった。条約を支持する者と不満を抱く者との間で内戦状態になる。若者がかつての仲間から殺されるという事態になっていく。この映画では、カトリックを信じるアイルランド系の住民と英国国教会を信じる英国軍という図式はあまり強調されていない。主義主張のゆえ、かつての同志をさえ殺していくシーンがストーリーの中心をなしている。戦争を美化することに努める人たちへの、ケン・ローチ監督の静かな怒りのメッセージが伝わる。

こうした紛争に直面したときのカトリックの神父の描き方も注目される。神父が登場する場面は2回ある。英国を攻撃する前に神父が祈るシーンと、英国との間に条約ができたあと、神父がこれに従うように説教するシーンである。前者では神父は神が自分たちを加護するように祈る。イエスの受難を引き合いに出して攻撃に精神的支えを与える。そして後者では、神父が英国との条約に従うように諭し、過激派は破門であると宣言する。

『ブラディ・サンデー』⁷⁰は1972年1月30日の日曜日、北アイルランドのデリー（ロンドンデリー）市でデモをしていた一般市民13名が英国軍の発砲で死亡した事件を扱う。現場に居合わせた人物の原作を基にしている。2002年のベルリン国際映画祭で金熊賞、サンダンス映画祭で観客賞、ディナールイギリス映画祭では作品賞を受賞していて、きわめて評価の高い作品である。

1922年の英国からのアイルランド独立以後も、アイルランドの北部六州は英国の統治下にとどまった。そしてユニオニストは英国との結びつきを重視し、ナショナリストはアイルランドへの統合を求め、両者の激しい対立が生じることになった。ユニオニストはプロテスタント勢力で、ナショナリストはカトリック勢力であるので、必然的に宗教紛争の性格が強くなった。

1972年はカトリック系住民の公民権運動が高まっていた時期である。地元出身のアイバン・クーパー下院議員は運動を推し進めるため、平和なデモを企画していたが、暴徒に手を焼く経験をしていた英国の軍隊はパラ部隊を投入し、フーリガンを逮捕する機会をうかがった。壁の上に狙撃兵を並べ、デモ隊を刺激したので、若者たちがそれに過敏に反応する。そしてコースを外れた一群に対し、狙撃兵が発砲する。丸腰の市民が次々と倒れる。英国軍が英国国民を殺害するという忌まわしい事件が勃発するのである。

④アフガニスタン問題

1979年は旧ソ連によるアフガニスタン侵攻の年である。『君のためなら千回でも』⁷¹では、ソ連侵攻以後大きく変わったアフガニスタンでの民族対立とそこに絡む宗教問題が描かれる。ソ連侵攻以前の比較的人々が自由であった時代の風揚げのシーンが前半の光景を彩る。原題のThe Kite Runnerは、この風揚げから取っている。少年アミールは反共産主義者の父をもち、裕福な家庭に育つ。アミールの父の召使の子供が一つ年下の少年ハッサンである。ふたりは仲良しで、風揚げ大会にコンビを組み優勝する。だがハッサンが年上の子に性的暴行を受ける場面を見ながら、アミールは知らぬ振りを、アミールはしだいにハッサンを避けるようになる。前半ではハッサンがいじらしいほどアミールに尽くす姿が描かれるが、そこにはアフガニスタンにおけるパシュトゥーン人とハザラ人の関係が示されてもいる。同じムスリムでもパシュトゥーン人はスンニ派で、ハザラ人はシーア派が多い。モンゴル系の風貌のハザラ人をパシュトゥーン人はしばしば蔑視する。ムスリムは皆平等というのが理念だが、実際は民族によってしばしば階層的に分断され、対立も起こる。これもその一つの例である。ハッサンはハザラ人であり、アミールや暴行した少年たちはパシュトゥーン人であった。

ハッサンと彼の父がアミールの嘘がもとで家を出たあと、ソ連侵攻が起こる。アミールの一家はアメリカへと逃げる。大学を卒業し作家となったアミールがカブールに向かってハッサンの息子を探すのが後半のトピックだが、ここではタリバンが占領した地域での息苦しい生活が描かれる。姦通した女性をサッカー場で公開処刑する一方、孤児院の子どもを男女間

わずさらっては性的虐待をしている兵士たち。タリバンを強く批判する描き方になっている。

(2) グローバル化がもたらす宗教の複雑化

多様な宗教的価値観を理解しようとすることは、宗教文化教育にとって非常に困難な課題の一つである。とりわけ対立し互いに批判し合うような局面について扱うのは、非常な注意と配慮が求められる。そのむずかしさを具体的に示してくれる映画もいくつかある。

『11'9"01 / セプテンバー 11』⁷²は2001年9月11日の同時多発テロをテーマに制作された事件である。世界的に著名な11人の映画監督によるオムニバス形式の映画で、「11分9秒」と1カットの短編が11作品含まれている。それぞれ異なる宗教文化が支配的な国の監督が独自の視点から作品を作っている。第59回ヴェネチア国際映画祭で最優秀短編賞とユネスコ賞を受賞した。

その一つ、インドのミラ・ナイール監督が描いたのは、実際に事件で息子をなくした事件現場に住むパキスタン系のムスリム一家の悲劇である。一家の自慢の息子は実は飛行機が突っ込んだ世界貿易センターで救助活動中に死亡したのである。だが、ムスリムであったがゆえに、当初数週間にわたってテロリストという疑惑を受けた。近所の人々が彼の両親を見る目も冷たくなる。事実が判明すると、彼は英雄の扱いを受けるが、母親の嘆きが癒されるはずはない。「人情味のある息子を育てた代価がこれ？」というつぶやきは、やり場のない悲しみと怒りの表現である。アメリカにおいてムスリムとして生活するときの壁。けっして「人種の坩堝」ではなく、「サラダボール」であると指摘されるアメリカの厳しい現実への告発と読み取れる。

アモス・ギタイ監督（イスラエル）は、テルアビブでの爆弾テロが9.11のテロによって、たちまち背後に押しやられる光景を皮肉に描く。パレスチナ問題を抱えたイスラエルでは、テロ事件は絶えず起こる。現場で声高に叫ぶリポーターだが、テレビ・クルーはニューヨークでの事件にさっと切り替えさせられる。ニュース報道では、どちらが衝撃的かで放映が選択される。他に競合するテロがなければ放映されたであろうテルアビブの事件が、ニューヨークで起こった事件で、一挙に背後に追いやられたのである。

その他、サミラ・マフバルマフ監督（イラン）は、アフガン難民の子供たちが通うイランの小さな学校を舞台に設定する。クロード・ルルーシュ監督（フランス）は耳の不自由な女性写真家とツアーガイドの愛を描く。ショーン・ペン監督（米）は、一人暮らしの老人の部屋がタワーの崩壊で光が差すようになったシーンを挿入。ユーセフ・シャヒーン監督（エジプト）は、さまざまなテロで死んだ人の霊との対話を描く。ダニス・タノヴィッチ監督（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）は、セルビア人によるムスリム大量虐殺に対する女性たちのデモを扱う。イドリッサ・ウェドラオゴ監督（ブルキナファソ）は、アフリカ西海岸ブルキナファソで賞金目当てにビン・ラディンを探す子どもたちをややコメディタッチで描く。少年たちは彼を捕えると2500万ドルもらえるという新聞記事を読んだのである。ケン・ローチ監督（英）は、チリで1973年に起きた事件との連想へといざなう。アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督（メキシコ）は、9.11の実際の映像、ときに音声のみを流す。そして今村昌平監督は、太平洋戦争に重ね合わせて、聖戦への批判を訴える。

イスラームが関連するテロが起こると、必ずと言っていいほど、聖戦（ジハード）という

が概念が取り上げられる。イスラームに理解を示す人は、ジハードは本来的には精神的なものが中心であったとする。すなわち心を治める大ジハードこそ肝要で、戦闘は小ジハードであるとする。だが実際にはもっぱら戦い際してジハードという言葉が用いられる。戦いを鼓舞するために宗教的理念を用いるということには、ここに作品を寄せた監督たちはおそらく否定的な思いを抱いているであろう。とりわけ今村昌平監督製作のものは、聖戦というスローガンへの強い嫌悪感に貫かれている。

(3) カルト・セクト問題

1995年3月に起こったオウム真理教による地下鉄サリン事件以後、「カルト・セクト問題」も日本の宗教文化教育における重要な課題として浮上してきた⁷³。宗教活動はすべて善であるという前提はもはや社会的に支持されなくなっている。日本ではむしろ「宗教は危険である」という見方も若い世代では増えている。

『ガイアナ 人民寺院の悲劇』⁷⁴は、1978年に南米のガイアナで新興宗教団体の人民寺院（ピープルズ・テンプル）の信者たち900人以上が集団自殺した事件を題材にとった映画である。サンフランシスコにあった教会で、教祖のジェームズ・ジョンソン（実際の人民寺院の教祖はジェームズ・ウォレン・ジョーンズ）が信者たちに世の乱れを説くところから話は始まる。この国は約束の地、選ばれた地ではないとして、南米のガイアナに移住すると伝える。かくてガイアナのジョンソントウン（実際はジョーンズタウン）へ集団移住するが、そこでの共同生活はしだいに束縛が強いものとなり、信者には強制労働のような日々となる。この情報を得た下院議員のオブライエン（実際はレオ・ライアン）は、実態を調査すべくガイアナにやってくる。実態が明らかになりそうになり、共同体を立ち去ろうとしていたオブライエン一行はジョンソンの指示に従った信者数名に射殺される。追い詰められたジョンソンは、信者全員に毒を飲ませる。

人民寺院事件では900人以上が集団自殺したので世界的に衝撃をもたらした。米国では1993年にテキサス州ウェイコでブランチ・デヴィディアンがFBIとの銃撃事件を起こした。1997年にはカリフォルニア州でヘブンズゲイトの信者39人が集団服毒事件を起こした。1990年代前半にはスイスに本部をもつ太陽寺院（ソーラーテンプル）が各地で集団自殺事件を起こした。こうした事件で危険性をもった宗教団体という意味でのカルトないしセクトという言葉は頻繁に使われるようになった。しかし、他方でこうした事件に至らなくても、半ば強制的なやり方、あるいは非常にマニュアル化されたやり方で、人々を不安に陥らせたり、家族から引き離そうとしたりする行為に着目する研究者もいる。この場合にはしばしば洗脳とかマインドコントロールといった概念が参照される⁷⁵。

こうした視点からのカルト・セクト問題に関しては、『ザ・マスター』⁷⁶が一見の価値がある。第二次大戦が終わり、米国の兵士たちは戦場から解放されたが、多くの兵士は新しい職場を求めなければならなかった。フレディ・クエルもその一人だが、彼は精神的な問題も抱えていて、行く先々の職場で問題を起こした。そうしたフレディが会うのが、小さな宗教集団のリーダーであるランカスター・トッドで、トッドは信奉者たちからは「マスター」と呼ばれていた⁷⁷。

心の病を抱えるフレディとマスターは相互依存関係に近い。マスターもある意味、心の問題を抱えているからである。マスターの息子はそのいかがわしさを見抜いているようであ

る。フレディはマスターのやり方に反発を覚えたりしながらも、統御できない心の問題にずっと向かい合う。

その前年に公開された『マーサ、あるいはマーシー・メイ』⁷⁸も、やはりカルト・セクト問題に直結するストーリーである。カルト的集団からの生活から逃げ出した一人の若い女性の心理と行動を描いているが、現実と過去の記憶とを交互に描写していくやり方が、サスペンシ的な雰囲気を生み出している。

パトリックをリーダーとする集団と暮らしていたマーサは、そこではマーシー・メイという名前をもらっていた。その集団は表面上は農場を営むようにみせかけているが、実は盗みもするし、みつかれば殺人さえいとわない。「浄めの儀式」の名のもとに、リーダーは女性たちと性的に交わる。2年の間そこで生活した後、マーサは脱走を試みる。唯一の身寄りである姉のルーシーに連絡し、姉夫婦のもとに身を寄せる。ルーシーは深くは事情を聞かず、妹の支えとなろうとする。しかし姉夫婦と同居を始めたマーサは、周囲を戸惑わせる奇妙な行動を繰り返す。裸で湖で泳いだり、突然どなったり、性行為中の姉夫婦の寝室に突然はいってきたりする。すべて集団で生活していたときの習性であり、またトラウマである。

心理的な面からカルト・セクト問題を扱った映画は、非常にシリアスな描き方になる。一定期間特異な集団生活を送った人間には、その集団特有の身体的記憶が刻まれる。理性で判断しての是非とは別に、体と心が自然に反応してしまうようになった人間の描写を扱うとなると、宗教文化の理解という範囲を超えるような局面が出てくる。それゆえこうした類の映画を宗教文化教育の教材に用いる場合には、カルト・セクト問題の対象とされるような教団なり運動についての認識を、一定程度蓄えておくことが必要とされる。

むすび

以上、宗教文化教育の教材として用いうる映画を、4つのテーマに分けて取り上げた。最初に述べたように、本稿では宗教文化教育に関わる映画を網羅的に論じてはいないし、ここで設けたテーマも暫定的なものである。評価の高い映画、話題になった映画、そしてDVDやビデオで入手しうる映画などをとりあえずの対象としている。また宗教文化教育にとっては自国の宗教文化の理解を深めることと、外国の宗教文化の理解を深めることの双方が課題であるが、本稿では後者に力点を置いた紹介となっている。前者に関しては稿をあらため論じたいと考えている。

映画を宗教文化教育に用いる際の手引きの一つは、井上順孝編『映画で学ぶ宗教文化』（弘文堂、2009年）として刊行されている。同書には82の映画の紹介とその他百余の作品についての短い言及とがある。またこれを受けて、書籍よりも広く情報を共有するために、ウェブ上に「宗教と映画文化」のデータベースが作成され、情報は逐次更新されている⁷⁹。本稿はこうした研究を踏まえ、映画を宗教文化教育の教材として取り上げるに適していると考えられる映画名を具体的に示し、そこで可能になるテーマを例示したものである⁸⁰。扱った対象に偏りがあることは否めないにしても、最後にこうした際に生じると考えられる当面の課題についてまとめておきたい。

ここで紹介した映画にはキリスト教、イスラーム、仏教、ヒンドゥー教、ユダヤ教の教えや儀礼、実践などが見出される。これらはグローバル化が進むこれからの時代に日本人が遭遇する確率が高いと考えられる宗教文化である。キリスト教に関連するものが多くなったの

は、日本において入手できる素材としては、やはりキリスト教関係が多いことに起因する。いわゆる宗教映画と中心的テーマは宗教でないものの双方が含まれるが、教材とするうえで、両者を厳密に分けることはしばしば困難であるし、あまりそのことにこだわる必要はないと考える。

日本映画の場合であると、教団作成の映画、たとえば天理教の『扉は開かれた』（1975年）、金光教の『教えは和賀心にあり』（1983年）、創価学会の『人間革命』（1973年）などは、主として信者を対象としている。しかし、『日蓮』（1979年）、『空海』（1984年）、『親鸞—白ひ道』（1987年）、『禅ZEN』（2008年）などは各仏教宗派の開祖の生涯を扱っている宗教映画であるが、広く一般の日本人を対象としたものである。そして同時に日本の仏教文化を知る上で参考になる。たとえばドイツで制作された『MON-ZEN』⁸¹は禅に惹かれて日本にやってきたドイツ人を描く喜劇的要素のある映画だが、これを道元の生涯を描いた『禅ZEN』と比較しながら禅文化を考えるという方法もある。宗教映画かそうでないかより、視点の違いがどこにあるかを考えた方が教育の場では広がりが出る。

では視点の違いという場合、どのようなことに留意すべきであろうか。主として誰の立場に立っているかは、まず認識しようと努めるべき事柄である。特定の個人やグループ、教団、民族あるいは国家など、レベルはさまざまだが、誰の立場ということはきわめて重要である。またその立場に立っているのが自覚的か、無自覚的かについても吟味すべきである。これは一つの作品に対する多様な解釈という以前のこととして、映画を宗教文化教育の教材として用いるときに踏まえておかなければならない根本的な事柄である。

映画の製作者と鑑賞者とを分けて考えた場合、まず映画の制作はさまざまな人々の思惑の集合体であることにも留意しておかなければならないだろう。ヒットするしないの経済的問題。どんな社会的メッセージを込めるかの政治的あるいは社会的問題。どんな価値観を示すかの宗教的、倫理的、さらに哲学的問題。娯楽に徹底するかしないかの遊び的問題。こうした数多くの要因に関して、制作会社、監督、演出家、出演者など制作に関わる人々は、大なり小なりそれぞれの関与をすることになる。

できあがった作品を鑑賞する側もまた多様である。制作者が想定していなかったような鑑賞者も当然出てくる。内容に大きな権限をもつ監督だが、その監督が想定しうる鑑賞者には限りがある。さらに同じ人物が異なった時期に同じ映画を観て、異なった場面に注意を向けるということがありうる。若い頃と年取った頃でも見方が変わるかもしれない。制作側が孕み持つ多様性と制作者が意図していなかった要因、そして鑑賞者側のそのときどきの多様な評価。こうしたことを大前提としながらも、宗教文化教育として用いるときにとりわけ注意を払うべきことがある。

まず自分があまり体験することのない宗教文化への理解を、映画を通して行うことは非常に難しい。それはとりわけ強い偏見をもって描かれた映画であることを感知しようとする際に顕著である。自分が専門的な研究対象としている宗教史以外については、偏見を見抜くことがきわめて困難な場合があると考えられるからである。さらに偏見の存在が見て取れても、それをどの程度考慮して教材に用いるかも難しい。

これはおそらく教員個人の努力では到底解決しえない事柄である。それを多少でも克服しようとするなら、少なくとも次の二つの準備ないし実践が必要になる。一つは教員相互のネットワークを形成することである。もう一つは教材として与えられた側、つまり学生側の

反応なり解釈の収集に努めることである。一番目と二番目を重ねると、学生からの反応を教員が共有していくことが重要になってくる。これによって、認知科学において議論されるテーマの一つである認知バイアスに関わる問題にある程度対処できる。制作者側の作ったフレームは対象に関する認知バイアスを必ず含む。鑑賞する側もまた認知バイアスをもって観る。バイアスは避けがたいものであり、常に再生産されるものである。それが社会的に負のスパイラルの原因とならないように努めることである。これが映画を宗教文化教育の教材とし、かつ教員相互のネットワークを形成するうえでのもっとも肝要な点の一つである。

*本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者・井上順孝）による研究成果の一部である。

注

- 1 2009年9月20日に國學院大學日本文化研究所で開催された国際フォーラム「映画の中の宗教文化」のパネリストの一人であったジャン-ミシェル・ビュテル（Jean-Michel Butel）氏は、「アニメはどんな宗教を語ってくれるか」という発表で、『平成狸合戦ぽんぽこ』という映画のなかに日本文化や日本宗教がいかに混じりこんでいるかについて言及した。これについては井上順孝編集責任『国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」報告書』、2010年、國學院大學、を参照。
- 2 *The Encyclopedia of Religion and Film*, ABC-CLIO, 2011 には宮崎駿の項目が立てられているが、宮崎アニメを通して日本宗教を議論する論考は数多くある。
- 3 これについては1990年代に國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトで実施した宗教系の学校に教材に関して質問したアンケートの結果が参考となる。國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』（弘文堂、1997年）の資料篇を参照。
- 4 原題：Scrooge、監督：ロナルド・ニーム、米国。なお1951年にも同名の映画が制作されたが、入手が困難である。
- 5 原題：A Christmas Carol the Musical、監督：アーサー・アラン・シーデルマン、米国、2004年。
- 6 原題：A Christmas Carol、監督：ロバート・ゼメキス、米国、2009年。
- 7 原題：Four Christmases、監督：セス・ゴードン、米国、2008年。
- 8 原題：Hjem til Jul、監督：ベント・ハーメル、ノルウェー、ドイツ、スウェーデン、2010年。
- 9 原題：Miracle on 34th Street、監督：ジョージ・シートン。なお、1994年にリメイクされたが、ストーリーは多少異なっている。
- 10 原題：Joulutarina、監督：ヨハ・ウリオキ、フィンランド、2007年。
- 11 監督：伊丹十三、日本、1984年。
- 12 監督：滝田洋二郎、日本、2008年。
- 13 監督：君塚良一、日本、2012年。
- 14 原題：少林三十六房、監督：劉家良、香港、1977年。
- 15 達磨に関しては「面壁九年」という言葉がある。達磨太子は中国に来て、少林寺において壁に向かって9年間ひたすら座っていたとする伝説である。そうした静かな禅の教えと、荒業をもつ拳法とがどうつながるのか。推測されているのは、達磨は王子であったがゆえに、中国に来るにあたっては、護衛としてインド拳法の達人が随伴し、その護衛の者たちが中国に拳法を伝えたのではないかということである。
- 16 宗道臣の少林寺との関わりについては、井上順孝編『近代日本の宗教家101』（新書館、2007年）の「宗道臣」の項を参照。

- 17 原題：少林寺、監督：ベニー・チャン、香港、中国、1982年。なおこの映画の製作を支援したのが宗道臣の創設した少林寺拳法連盟である。宗道臣の娘としてその後継者となり、現在少林寺拳法グループ総裁であるのが宗由貴氏である。同氏も、父の遺志を継ぎ、日中友好に力を注いでいる。少林寺の壁画の修復に取り組み、2002年には少林寺希望小学校を設立するなどしている。1980年頃は少林寺は文化大革命の影響もありさびれていて、僧侶は数名しかいなかったという。しかしこの映画で少林寺ブームがおき、現在は700人を超える僧侶がいるとされる。
- 18 原題：新少林寺、監督：チャン・シン・イェン、香港、中国、2011年。
- 19 これらの香港映画は『幽玄道士』（1986年）といった台湾映画に影響を与えた。
- 20 原題：우리들의 행복한 시간、監督：ソン・ヘソン、韓国、2006年。なおこの映画の原作である孔枝泳著の小説を日本語に翻訳したのは、1978年に北朝鮮に拉致され2002年に帰国できた蓮池薫氏である。
- 21 原題：방문자、監督：シン・ドンイル、韓国、2006年。
- 22 原題：Little Buddha、監督：ベルナルド・ベルトルッチ、米国、1993年。
- 23 原題：Bombay、監督：マニラトナム、インド、1995年。
- 24 1992年12月6日、ウツタルプラデーシュ州アヨーディヤーのイスラームのモスクであるバーブリー・マスジドを暴徒化したヒンドゥー教徒が襲って破壊した。アヨーディヤーは叙事詩ラーマーヤナの主人公であるヒンドゥーの英雄神、ラーマの生誕地であり、モスクはラーマ誕生地寺院を破壊して建てたものだと信じていた。ヒンドゥー教徒とムスリムの対立を象徴する事件の一つである。
- 25 原題：Om Shantio Om、監督：ファラー・カーン、インド、2007年。
- 26 原題：Habemus Papam、監督：ナンニ・モレッティ、イタリア、2011年。
- 27 原題：The Pope Must Die、監督：ピーター・リチャードソン、英国、1992年。
- 28 原題：The Nun's Story、監督：フレッド・ジンネマン、米国、1959年。
- 29 原題：Soeur Sourire、監督：ステイン・コニクス、フランス、ベルギー、2009年。
- 30 原題：Doubt、監督：ジョン・パトリック・シャンリー、米国、2008年。
- 31 原題：Oh, God!、監督：カール・ライナー、米国、1977年。
- 32 原題：Oh, God! Book II、監督：ギルバート・ケイツ、米国、1980年。
- 33 原題：Oh, God! You Devil、監督：ポール・ボガート、米国、1984年。
- 34 原題：Bruce Almighty、監督：トム・シャドヤック、米国、2003年。
- 35 原題：Evan Almighty、監督：トム・シャドヤック、米国、2007年。
- 36 原題：Jesus Christ, Superstar、監督：ノーマン・ジュイソン、米国、1973年。
- 37 原題：The Last Temptation of Christ、監督、米国、1988年。
- 38 原題：The Da Vinci Code、監督：ロン・ハワード、米国、2006年。
- 39 2012年9月29日（土）13:00～18:00、國學院大學渋谷キャンパス 学術メディアセンター1F 常磐松ホール。概要については『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』6号、2013年参照。
- 40 原題：Monty Python's Life of Brian、監督：テリー・ジョーンズ、英国、1979年。
- 41 原題：Postia Pappi Jaakobille、監督：クラウス・ハロ、フィンランド、2009年。
- 42 原題：Witness、監督：ピーター・ウィアー、米国、1985年。
- 43 原題：For Richer or Poorer、監督：ピーター・ウィアー、米国、1997年。
- 44 原題：Inherit The Wind、監督：ダニエル・ペトリ、1999年。
- 45 原題：Inherit the Wind、監督：スタンリー・クレイマー、米国、1960年。
- 46 原題：Jesus Camp、監督：ハイディ・ユーイング、レイチェル・グレイディ、米国、2006年。
- 47 ドーキンスは原理主義に焦点を当てているが、宗教全般への批判的視点もある。これについては、ドーキンス『神は妄想である—宗教との決別』早川書房、2007年（原著：Richard Dawkins, *The God Delusion*, Houghton Mifflin Harcourt, 2006）や、同『悪魔に仕える牧師—なぜ科学は「神」を必要としないのか』早川書房、2004年（原著：A Devil's Chaplain: Reflections on Hope, Lies, Science, and

Love, Houghton Mifflin Harcourt, 2003) などを参照。

- 48 ID 論と日本で一部に広がっている「サムシング・グレート」との関連についての論考として、藤井修平「日本における反進化論思想と道徳教育の結びつきー「サムシング・グレート」を例にー」(『ラック便り』63号、国際宗教研究所・宗教情報リサーチセンター、2014年)を参照。
- 49 Church of the Flying Spaghetti Monster の公式ホームページの URL は次のとおりである。<http://www.venganza.org/>
- 50 原題：THE MESSAGE、監督：ムスタファ・アッカド、モロッコ、クウェート、リビア、サウジアラビア、1976年。
- 51 原題：Hafez、監督：アボルファズル・ジャリリ、イラン、日本、2007年。
- 52 原題：Persepolis、監督：マルジャン・サトラピヴァンサン・パロノー、フランス、2007年。
- 53 原題：Argo、監督：ベン・アフレック、米国、2012年。
- 54 原題：East is East、監督：ダミアン・オドネル、英国、1999年。
- 55 原題：Ali、監督：マイケル・マン、米国、2001年。
- 56 日本ではネイション・オブ・イスラームについての研究はまだそれほど多くはないが、基本的な紹介としては Ch. パートリッジ編『現代世界宗教事典』(悠書館、2009年)の「ネイション・オブ・イスラーム」の項目、あるいは『世界宗教百科事典』(丸善出版株式会社、2012年)の「ネイション・オブ・イスラーム」の項目を参照。
- 57 原題：My Big Fat Greek Wedding、監督：ジョエル・ズウィック、米国、2002年。
- 58 原題：God Has a Rap Sheet、監督：カメル・アメッド、米国、2003年。
- 59 原題：My Name Is Khan、監督：カラン・ジョーハル、インド、2010年。
- 60 原題：Almanya - Willkommen In Deutschland、監督：ヤセミン・サムデレリ、ドイツ、トルコ、2011年。
- 61 原題：Paradise Now、監督：ハニ・アブ・アサド、フランス、ドイツ、オランダ、パレスチナ、2005年。
- 62 監督：広河隆一、日本、2011年。
- 63 原題：Disengagement、監督：モス・ギタイ、イスラエル、イタリア、フランス、ドイツ、2000年。
- 64 原題：THE SYRIAN BRIDE、監督：エラン・リクリス、イスラエル、フランス、ドイツ、2004年。
- 65 原題：Des Hommes et des Dieux、監督：グザヴィエ・ボーヴォワ、フランス、2010年。
- 66 原題：Va, Vis et Deveins、監督：ラデュ・ミヘイレアニュ、フランス、2005年。
- 67 エチオピアのユダヤ教徒をイスラエルに移送する計画は2度実施された。この映画で紹介される「モーセ作戦」と1991年の「ソロモン作戦」である。この2つの作戦で2万数千人のファラシャがイスラエルに移住できたとされている。しかし、その過程で飢え、襲撃、拷問などによって、数千人が命を落としたと言われる。きわめて過酷な出来事がこの映画の背景に存する。このような計画の背後には周りをイスラーム国に囲まれたイスラエルが、ユダヤ人の人口を増やさなければならないという要因が大きく介在している。
- 68 この映画の字幕監修は現代ユダヤ教研究の専門家白杵陽氏である。こうした宗教的背景が深く関わる映画に、専門家の監修がはいることは好ましいことである。
- 69 原題：The Wind That Shakes the Barley、監督：ケン・ローチ、アイルランド、英国、フランス、2006年。
- 70 原題：Bloody Sunday、監督：ポール・グリーングラス、英国、2002年。
- 71 原題：The Kite Runner、監督：マーク・フォスター、アメリカ、2007年。
- 72 原題：11'9"01 September 11、監督：ケン・ローチ、ショーン・ペン他、フランス、2002年。
- 73 日本や米国ではカルト問題と呼ばれ、ヨーロッパではセクト問題と呼ばれるので「カルト・セクト問題」と表現しておく。この用語を使用するようになった経緯については井上順孝編『現代宗教事典』(弘文堂、2005年)の「カルト・セクト問題」の項を参照。

- 74 原題：Guyana: Crime of the Century、監督：ルネ・カルドナ・Jr、パナマ、スペイン、メキシコ、1980年。
- 75 こうした観点からのカルト問題の整理には、櫻井義秀『「カルト」を問い直す—信教の自由というリスク』（中公新書 2006年）を参照。
- 76 原題：The Master、監督：ポール・トーマス・アンダーソン、米国、2012年。
- 77 マスターの風貌、作家、医者、原子物理学者、理論哲学者、こうした多くの分野にまたがる肩書、また第二次大戦後ほどない時代設定ということからして、この団体のモデルがサイエントロジーではないかという見方が生じた。マスターが信奉者たちに施す療法が、コース・メソッドと呼ばれているが、これもサイエントロジーのオーディティングを連想させるものである。
- 78 原題：Martha Marcy May Marlene、監督：ショーン・ダーキン、米国、2011年。
- 79 科学研究費補助金 基盤研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表者・井上順孝)による研究成果である。URL は下記のとおり。
<https://sites.google.com/site/cercfilms/>
- 80 2007年以來毎年刊行されている渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本』（平凡社）にはデータ集の一つとして「宗教がわかる映画ガイド」のコーナーがある。このコーナーの執筆にあたり、毎年10点程度を紹介しているが、宗教文化教育に関連するものも含まれている。本稿に扱い得なかったものについては、そちらを参照のこと。また筆者が扱った書籍の一覧は下記のホームページのうち「宗教関連の映画のエッセイ・リスト」のサイトで公開している。
<http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/>
- 81 原題：Erleuchtung Garantiert、監督：ドーリス・デリエ、ドイツ、1999年。